三　伝統行事

「薪御能図」（森川杜園筆）

東大寺お水取り

はじめてお水取りを見学したのは大学院生のときであった。お松明から五体投地、お水取り、達陀（だったん）の行法まで、夜を徹して拝観した。あまりの寒さに、東大寺の平岡定海師の塔頭上之坊でたびたび暖をとらせてもらった。そのころ、ふとしたことから、若狭遠敷谷（おにゅうだに）にある古刹応頂山（おうちょうざん）神宮寺に出入りが許され、夏の間はこの寺で過ごすことが多かった。東大寺が「お水取りの寺」なら、神宮寺は「お水送りの寺」である。お水取りに先立って、その行事が神宮寺の傍らを流れる遠敷川の「鵜之瀬（うのせ）」と呼ぶ淵で、夜に行われる。ある年、京都大学名誉教授で歴史学者の中村直勝先生が来山され、ご住職山河尊護師のはからいで、先生をお水送り神事にご案内することになった。神韻たる夜気と先生の偉風がみごとに融け合っていた。毎年、お水取りのころになると、蒼い「鵜之瀬」の淵に佇む中村先生のお顔を思い出す。私といえば、幼いというほどに若かった。

山焼き

新興住宅地が寺や神社のすぐ近くまで押し寄せ、古くからの住民と新来の人たちとの間で、その土地の伝統への理解と協調がスムーズにいかず、そのためもあってか、民間信仰や伝統行事の継承が危ぶまれる昨今だが、まだまだ大和には、小正月（一月一五日）に行われる火の行事が残っている。各地の村むらでは、正月神の送り火のトンド（左義長）が行われ、その火を家に持ち帰り、神仏に供える種火にする。

トンドの火で小豆粥を炊いて祝う風習もある。御所市にある吉祥草寺の左義長（さぎちょう）や五条市にある念仏寺の陀々堂の鬼走り、さらには桜井市にある長谷寺のダダオシなどもよく知られる。しかし、火の行事といえば、その規模といい、豪壮さといい、南都の夜空を焦がす若草山焼きにつきよう。これの起源を明らかにしない。伝承によれば、かつて東大寺と興福寺との間に境界争いがおこり、これに奈良奉行所が仲裁に入り、以後五万日間、紛争を奉行所預かりとし、それを契機としてはじまったともいわれるが、どのような理由で山を焼くようになったのか、わからない。

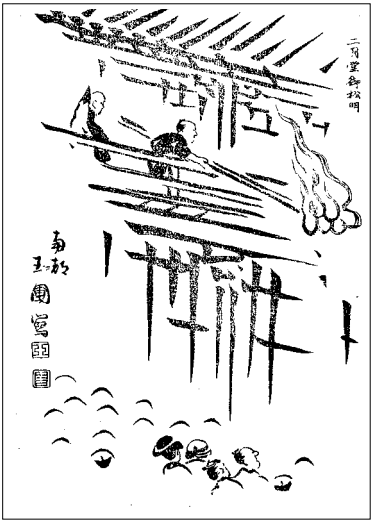
元文五年（一七四〇）に村井古道が著した『南都年中行事』は、春にこの山を焼かない年には、「牛鬼」という妖怪が現われるので、妖怪を鎮めるために行われたとの言い伝えを紹介する。

山焼き（矢野建彦撮影）

現在は夕闇迫るころに、山すそから火が点けられるが、明治三三年（一九〇〇）ごろまでは、昼に行われていたという。ともかく、火をともなう行事は、春を迎える儀式でもある。

二月堂

「上院」と呼ばれる東大寺大仏殿東の小高いところには、良弁僧正像を安置する開山堂や不空羂索観音像をまつる法華堂など、東大寺にとって主要な堂宇があるところで、二月堂はそのなかでも一段高いところに建っている。毎年三月、二月堂で行われる東大寺のお水取りは、まさに春を告げる行事で、正しくは「二月堂修二会」「十一面悔過法要」という。



二月堂御松明
（『大日本名産図会』）

国家や社会、あるいは人びとの犯した罪過を、心身の穢れをはらった東大寺の僧侶たち（練行衆）が、二月堂に籠って、ご本尊の十一面観音の前で観音の宝号を唱え、国や俗人になりかわって懺悔し、同時に国家安泰と五穀豊穣、そしてすべての人

びとの豊楽を祈願する法会である。旧暦の二月に行うことから「修二会」、あるいは二月堂石段の下にある「若狭井」から霊水（お香水）を汲んで本尊にお供えするところから「お水取り」、また、大きな籠松明が二月堂の欄干で振られことから「おたいまつ」とも呼ばれている。

「上院」には、東大寺の前身にあたる金鐘寺が建っていた。もともと、この寺は神亀五年（七二八）に、生後一歳で亡くなった聖武天皇と光明皇后との間に生まれた薄幸の皇子基王の冥福を祈って造営された山房であった。基王は生後わずか二か月にして立太子した皇子であった。

金鐘寺はそののち総国分寺となる。金鐘寺を主導した僧こそが良弁（六八九～七七三）であり、大安寺から講師として審祥という僧を招請して華厳講説を開始する。こうして、金鐘寺は華厳教学の中心となっていく。金鐘寺の中核的建物をなしていたのが羂索院（現在の法華堂）であり、良弁や彼の弟子で「お水取り」を創始した実忠（七二六～八〇九？）らがここを教学の拠点とし、華厳修学のほか密教にも通じていた。

「お水取り」は、「十一面神呪経」という密教経典の所説に基づいて行われる悔過行法であって、二月堂はこの行法を行うために実忠が設けた悔過堂であったのであろう。

修二会の行われる二月堂は、舞台をつける懸造の巨堂（十間×七間）で、それまでの建物が寛文七年（一六六七）の火災で焼失したため、翌年「先規に違わず」再建されたのが現在のものだが、創建に関する記録類がなく、その創建年代を明らかにしない。平安期の嘉祥元年（一一〇六）に成立した『東大寺要録』は、「三間二面庇瓦葺二月堂一宇」と記すのが最初の記事で、

平安期ごろの二月堂は瓦葺きの小堂であったらしい。その規模（三間×三間）は現在の二月堂内陣の大きさに相当する。

実忠和尚

お水取りは、前行と本行とからなり、本行に先立ち、俗界と火を別にした精進の生活をする前行を別火といい、心の精進と本行に備えての準備を行う。二月二〇日、十一人の練行衆が戒壇院庫裡の別火坊に集まるところから、すでにお水取りがはじまっている。ちなみに、この行法は、試別火（二月二〇～二五日）・総別火（二月二六日～二八日）・上七日（三月一日～七日）・下七日（三月八日～一四日）におよぶ長いものである。

二月堂のご本尊である十一面観音は、天平期以来、千三百年もの間、「秘仏」とされてきた。これまで誰一人として、そのお姿を目にした者はいない。たとえ、東大寺最高位の別当職でさえも拝顔は叶わない。ところが、これまでたった一人だけ目にした人がいる。その人こそ、「お水取り」をはじめた実忠和尚であった。

東大寺の初代別当は良弁僧正だが、実忠和尚はその良弁

二月堂

の弟子にあたる。『二月堂縁起』や『東大寺要録』などによれば、実忠和尚が笠置山の龍穴に籠もって修法したとき、十一面悔過を行法する場を目の当りにする。この行法の伝授を懇願する実忠に、「ここの一昼夜は、人間界の四百年にあたる。しかも行法は複雑である。また、生身の観世音がいまさねば果たせないことだ」とさとされる。

どうにかして行法を俗界に伝えたい一心の実忠は修行を重ね、そして、難波津の海辺に立ち、補陀落山の方向に向かって祈願すると、海の彼方から十一面観音が現われ、抱き上げると人肌の温もりがあった。すぐさま観音さまを二月堂の厨子に奉安したのであった。それ以来、厨子が開かれたことがない。だから、実忠和尚だけが知っている観音さまということになる。

『東大寺要録』が、実忠は弘仁六年（八一五）の四月二五日の現在、八五歳の高齢であるが、天平勝宝四年（七五二）から大同四年（八〇九）のほぼ六〇年にわたり、毎年欠かさず、二月堂で行ってきた、と記しているので、この法会が天平時代に実忠によってはじめられたことがうかがえる。その最初の年が、天平勝宝四年二月のことであった、そして、この年の四月には、大仏開眼供養会が行われている。以来、江戸時代の寛文七年（一六六七）の二月堂火災のときでさえ中止せず、今にいたるまで一度も停滞することもなく、連綿としてつづけられてきたのである。

青衣の女人

師走の一六日は、東大寺の境内に緊張感が走り、僧侶がより粛然とならざるを得ない。この日は東大寺開山良弁僧正の忌日にあたり、開山堂での法要の前に、管長が一山の僧侶を前にして、翌春の修二会参籠者の名と役割を読みあげるからである。

参籠する僧侶を練行衆（れんぎょうしゅう）といい、和上（わじょう）・大導師・咒師（しゅし）・堂司（どうつかさ）をはじめとする、あわせて十一人で構成される。その役割は重く厳粛で、喪に服するなどの特例のほかは、変更はどんなことがあっても認められない。

練行衆の行は、参籠する一か月ほど前からすでにはじまっており、まず戒壇院の別火坊に集まり「別火の行」に入る。別火とは、風呂や竈・灯明などの火を日常と別にして精進潔斎することをいう。その間に、二月堂の十一面観音の仏前を飾る「花拵え」（長寿を意味する椿）、本行の着衣となる「紙衣（かみこ）絞り」（和紙の着物）、堂内を照らす「灯芯揃」などの作業と諸準備を行い、三月一日に二月堂の北側下にある参籠宿所（大宿所）に移り、いよいよ一四日間の本行に入る。

本行（十一面悔過）を「六時行法」といい、正午に二月堂北側の石段下にある食堂（じきどう）で食事をとり（食堂作法）、それから二月堂に上堂する。毎日六回、昼から未明にかけて、内陣の本尊の周囲を右回りに巡り、観音宝号の「南無観自在菩薩」（声明）をリズミカルに唱える。この悔過のあとに、日本全土の神がみの名を読みあげ、二月堂に勧請する「神名帳読誦」がある。

さらに、黒光りする長大な板に右の膝から身体を打ち込む荒行「五体投地」の行法がつづく。

三月五日は、実忠忌の法要がある。この日と一二日には、「神名帳」読みあげのあとに、東大寺に有縁の人たち、すなわち東大寺を建立された聖武天皇をはじめ、光明皇后や良弁僧正、大仏建立にかかわった善知識、そして歴代の東大寺別当職やこれまで上堂した練行衆の名前などを記した「過去帳」奉読が行われる。これは、参籠五回目にして初めて許されるもので、大役でもある。

『二月堂縁起絵巻』によれば、鎌倉時代、集慶という練行衆のひとりが「過去帳」を読みあげていたとき、青い衣をまとった高貴な女御が現われ、しかも恨めしそうに「なぜ、私の名を読み落とした」と責めた。女性の名さえ知らないので、あわてた集慶は、とっさに低い声で「青衣の女人」と唱えたところ、その女性は幻のように忽然と姿を消したという。もちろん言い伝えではある。

「過去帳奉読」の時分ともなれば、「行」の疲れが頂点に達し、同時に荒行から解放され、ほっとする束の間の「時」でもある。それだけにあらぬ煩悩や幻想がふと脳裏をかすめるのかもしれない。「過去帳」は、聖武天皇をはじめとし、東大寺および二月堂にゆかりの人たち、そして鎌倉時代に東大寺の復興につくした俊乗坊重源の少し前に「青衣の女人」が登場する。ここまでは節をつけて、ゆっくりと読みあげ、そのあとはなぜか棒読みの早口となる。

若狭井

三月一二日は、「過去帳奉読」のあと、練行衆が二月堂本尊の周囲を早足でめぐる「走りの行法」がある。そして、この日の深夜から一三日の未明にかけては、いよいよ修二会のクライマックス「お水取り」が真っ暗闇のなかで行われる。そののちに「達陀の行法」がこれにつづく。これは、長さ三メートルの松明が内陣を引き回され、礼堂に投げ倒される激しい行法で、内陣は火の粉と煙につつまれる。

お松明は、修二会のはじまる一日からあがるのだが、この日（一二日）は、長さ数メートルの竹の先に直径一メートルにもおよぶ、ひときわ大きなお松明（籠松明）が、二月堂北側の石段をゆっくりと上がり、二月堂回廊の欄干から外に向って振り出される。漆黒の闇に幽玄の炎が舞いあがり、落下する火の粉はまるで滝のようであり、その燃え殻が厄除けによいというので、人びとはこれを奪い合う。

籠松明も終わり、夜も更けてくるといよいよ「お水取り」がはじまる。真っ暗闇のなか咒師を先頭とする六人の練行衆、そして閼伽桶をかついだ神人が二月堂の南側の石段を降り、二月堂の下にある閼伽井屋の中の井戸（「若狭井」、食堂のすぐ南隣）に、閼伽水（香水）を六荷汲みあげ、これをご本尊の十一面観音にお供えする。閼伽井屋の水を汲む作法は、咒師だけが行う秘法で、たとえ練行衆であっても内実を知ることはできない。

この閼伽井は、若狭国（福井県）の小浜と水脈がつながっているという。閼伽井屋と若狭と

の関係については、『二月堂縁起絵巻』はつぎのように語る。

天平時代に修二会が行われた際、実忠が「神名帳」を読みあげ、諸国の神がみを二月堂に勧請したとき、若狭国の遠敷明神だけが遠敷川で魚釣りをしていて遅れてしまった。そのお詫びとして遠敷明神は、お供えする霊水を奉献しましょうと言上したところ、黒と白との二羽の鵜が突然に現われ、鵜の飛び出したふたつの穴から甘露な清泉が湧き出したので、そこに石を敷いて井戸にしたという。これが若狭井のいわれである。

閼伽井屋

実際、閼伽井屋の中にはふたつの井戸があるときく。閼伽井屋から汲みあげられた霊水はご本尊に供えられ、また疾病平癒を願って外陣から手を指し伸ばす信者の人びとにも分け与えられる。

お水取りが「水の行法」「静の秘法」とすれば、一二日から三日間行われる「達陀（だったん）」は、「火の行法」「動の秘法」といえよう。練行衆は飛びあがるようにして堂内に火と水を撒き散らし、法螺貝と錫杖の音にあわせて燃えさかる松明をご本尊の厨子に向かって突き出す荒あらしい行法である。

「水取りや　瀬々のぬるみも　此日より」、かくて大和はいよいよ春を迎える。

西大寺の大茶盛

茶席は大の苦手である。茶会に招かれたりすると、もう朝から落ち着かない。それでも、ある大学では「茶道文化史」を講義したことがあるし、もっとおかしなことに、勤めている関西大学では、茶道部の顧問をつとめているのだから滑稽というほかない。はじめて西大寺の大茶盛を経験したのは、芦屋市史編集室の嘱託をしていた昭和四五年ごろのことで、まだ大学院生であった。『新修芦屋市史』に「叡尊上人彫像」（西大寺蔵）の写真掲載をお願いに参上した際、「こちらへどうぞ」と、大茶盛の茶席に案内された。着飾った若い女性たちばかりの匂うがごとく華やぐ雰囲気にすっかり舞いあがり、いささか興奮していたことや、いただく順番が回ってきて、重く大きな茶碗を持ちあげてはみたものの、加減がわからず、あふれ出たお茶で胸元を緑に染め、赤っ恥をかいた記憶などが鮮やかに残っている。生来の粗忽さは相変わらずだし、不調法は今もあらたまっていない。

春の茶宴

「南都七大寺」の一つに列する真言律宗総本山西大寺では、毎年四月一五・一六日の両日に「大茶盛式」が行われる。

一般には、「西大寺の大茶盛（おおちゃもり）」と呼ばれているこの春の行事には、荘重さのなかにも、驚きのまじるため息、押し殺したような笑い声が、方丈一八畳の大広間のそこここから漏れてくる、楽しい、しかも豪快で華やかな雰囲気が漂う。

茶席といえば、なべて薄暗く狭い茶室で、いかにも高価な道具を拝見しながら、これまた珍貴な茶碗でいただくのがごく普通だが、この茶席ばかりは、座敷には緋毛氈が敷かれてあり、使う茶碗も茶筅も尋常の大きさではない。すべてが異様である。「邪気を払い、五臓を強くする」という抹茶を、差し渡し一尺をこす大茶碗に点て、大勢の人が和やかな雰囲気のうちに飲みまわすこの行事は、西大寺だけで行われる特異な茶会である。

大茶盛

決して大げさではなく、女性ひとりではとても持ちあがらないほど重く大きいので、隣りの人の助けを借りて、ようやく口までもっていく。大きな茶碗に点てられたお茶は、五人ほどで飲みまわすほどの分量であるから、五人目ともなれば、すでにお茶がわずかしか入っていないこともあり、逆に残りすぎていて、ガブガ

ブといただく破目になることもある。大人の頭がらくにおさまる大きな茶碗に薄茶を点て、順次に飲みまわして行く様子はまさに壮観の一言につきる。一応かしこまって座ってはいるものの、だれの顔にも笑みがこぼれている。

今では春秋恒例となっている大茶盛式は、ともに千人をはるかに超えるという。近年は、観光行事として脚光を浴びていることもあって、また抜群の人気もあって、恒例以外でも、もとめに応じて催すようになった臨時の大茶盛式は、年間に何百席にもおよぶという。

茶盛

このユニークなスタイルの「西大寺の大茶盛」がいつのころからはじまったのか、確かなところはわからない。寺伝によれば、西大寺中興の祖とされる興正菩薩叡尊上人思円（一二〇一～九〇）が、鎮守八幡宮に献茶したその余服を参詣の人びとにふるまわれたのにはじまるという。その後のことや、どのような形式であったのかもわからない。

大学院生時代、そしてそののち、奈良に勤めるようになってからもずい分と教えていただいた歴史学者の永島福太郎先生によれば、西大寺の大茶盛は、史料の上からいえば、天文二年（一五三三）にさかのぼるといい、正月一四日に綱維（執事）の催す「茶盛」、そして一五日の「御塔茶盛」、さらに一六日の「山の茶盛」があって、ことに「山の茶盛」は永禄元年（一五五八）に「作り山」を禁じ、絵一鋪と立花だけで西室茶盛を行うべしと規定しているところから、こ

の茶盛こそ現今の大茶盛を示すものと説かれる。

ともかく、室町時代の末期にはすでに行われていたらしい。それ以来、江戸時代から現在まで連綿とつづいている行事である。

西大寺の大茶盛ではないが、「茶盛」の語が見えるのは、『大乗院寺社雑事記』の文明一五年（一四八三）六月一〇日の記事で、そこには大安寺己心寺の長老良算房という人物が、大乗院に対し、茶盛に使うための屏風を拝借したい旨が記されている。その茶盛とは、橘寺の長老に新任された良算房が、お迎えにきた橘寺の使者をもてなすためのものであった。茶盛とは、酒盛に通じ、いわば「茶振る舞い」であり、酒ではなく「茶もてなし」の意であった。

床飾り

さて、大茶盛だが、寺伝によれば、叡尊上人は延応元年（一二三九）正月に後七日（八日から一四日までの七日間）の歳首御修法（密教の秘法）を行い、その満願（最終日）の翌日の一六日に、西大寺鎮守八幡宮に参拝して御修法の満願成就の礼を申しのべた。その際、あわせてお茶を献上し、その献茶の余服を、参集した一般衆生にもふるまったという。「西大寺大茶盛式」はこれに由来するというのである。

叡尊上人がうやうやしく八幡宮にお茶を献上した早朝に

は、雪が降り積もっていた。上人は、その雪景にいたく心を奪われたという。だから現在も、大茶盛の行われる方丈の上段の間に、八幡宮社頭の雪景小祠を模してしつらえているのは、叡尊上人が献茶をした雪の美景に感嘆した故事にちなんでの床飾りとなる。そして、本来の大茶盛は、一月の修正会の仕上げとして行われたもので、その後は、叡尊上人の遺徳を追慕する茶宴として継承されてきた。

なお、明治末期から大正初年にかけて、わずかの間だけ中絶したが、大正四年（一九一五）に、奈良市の数寄者たちの尽力もあって復興し、その際に副席も設けられ、そこに赤膚焼の奥田木白や一刀彫りの森川杜園の作品などもあわせて展観された。

叡尊上人と茶

叡尊上人は、正応三年（一二九〇）に九〇歳の長寿で遷化する。その一〇年後に、後伏見天皇から興正菩薩の勅諡を賜る。勅諡とは、天皇の命により、没後にその人の徳をたたえて追贈される称号のことをいう。菩薩の諡号はめずらしい。これは、奈良時代、東大寺の毘盧遮那仏造立にあたり、勧進僧に起用されて貢献し、大僧正位を授けられ、また民衆の教化や社会福祉事業につとめた行基菩薩の前例にあやかるものであった。なお、興正とは、「仏教正法（正しい教法。正法・像法・末法の正法）を興された」の意味で、それほどに叡尊上人の慈徳が多くの人たちから慕われ、仰がれていた。

叡尊上人は、一般民衆の救済につとめ、施薬活動や架橋などの社会事業をおこした人で、身分を問わずに多くの人たちから尊崇をあつめた。叡尊は、興福寺の学侶を父に大和国添上郡箕田（現、大和郡山市）に生まれた。年少にして父を失い、十一歳で醍醐寺に入り、一七歳で剃髪する。その後、高野山で修行し、さらに東大寺にも学んだ。嘉禎元年（一二三五）からは、西大寺に移り住み、各地の寺や民衆に菩薩戒を授けてまわり、階層を問わず、じつに数多くの人たちの帰依を受けた。

弘長二年（一二六二）、叡尊六二歳の時に鎌倉幕府の執権北条時頼・時宗父子の招きで鎌倉に下ることになった。これ以前、弟子の忍性が鎌倉に下り、極楽寺に住し、北条氏の帰依を受けていたところから、その師匠にあたる叡尊上人の下向が強くのぞまれたためであった。

鎌倉下向の道中記である『関東往還記』（『西大寺叡尊伝記集成』）によれば、持参した茶で、「儲茶」といって、道中の先ざきの宿場で茶湯をふるまっている。これは茶を薬として、つまり薬療活動のひとつであったとみてよい。抹茶であったのか葉茶かはわからないが、持参したお茶は、おそらく西大寺の茶園でつくったものであったかと思える。

鎌倉初期に栄西禅師は、禅宗とともに中国から「宋の茶法（抹茶法）」を伝え、養生の仙薬として広め、『喫茶養生記』を著した。栄西禅師は、京都の栂尾高山寺の明恵（諱は高弁、一一七三～一二三二）に茶種を贈り、その茶木が生育したことにより、いよいよ茶が日本に根づくことになる。ちなみに一三世紀の中ごろには、奈良西郊の鳥見庄でつくられる茶が鎌倉に送

られて飲用されていたことが知られる。

叡尊上人が遷化すると、ほどなくして西大寺と秋篠寺との間で、境内山林をめぐって境界争いがおこった。その際の西大寺の正和四年（一三一五）の訴状には、絵図が添えられており、絵図の一画に「茶園」と記された場所が書かれてある。これによって、西大寺では、すでに茶園（茶畑）を設けていたことがわかる。なお、これは茶園という文字の初見であるだけに貴重といえる。

この訴状には、「秋篠寺衆徒が茶樹数百本を引き抜き、荒野にしてしまった」とあるので、規模のかなり大きい茶園であったことがうかがえる。訴状では、「忍性上人の植えた茶樹」としているが、あるいは師の叡尊上人がすでに営んでいた茶園に、新たに忍性が植えたのかもしれない。こうした茶園の植栽には、叡尊上人が私淑する栄西禅師と明恵上人の影響が大いにあったかと思える。

茶席案内

大茶盛の茶席となる方丈は、一八畳の大広間で、そこに目にも鮮やかな緋毛氈が敷かれ、お茶を拝服する人はその上に並んで座る。方丈上段の間の床飾りは、説相机を前に、左手に払子を持ち椅子に座る姿の叡尊上人画像が掛かり、その前には、鎮守八幡宮を模した朱色の小祠が置かれ、そのかたわらには金襴の打敷で山を見立てた仮山（築山）がつくられ、仮山には枝ぶ

りのよい実際の松を飾る。

八幡宮の屋根や仮山の松の葉には、真っ白い綿で降り積もった雪をあらわしている。もちろん、叡尊上人が八幡宮に献茶された日の、雪に見舞われた八幡宮社頭の美観をほうふつとさせる、雪景見立ての趣向となっている。

茶道具はすべてが大型で、まず台子（だいす）だが、これは同寺の古材でつくられたものといい、高さが三尺五寸、長さが四尺九寸、幅が二尺ほどもある。これの上段に、高台寺蒔絵の大利休形棗（なつめ）（直径七寸、高七寸三分）と直径一尺ほどの赤膚焼の奈良絵大茶碗が置かれ、下段には大型の風炉（高一尺二寸）と茶釜、古備前の水指（みずさし）（高一尺一寸）、古銅の耳付き杓立て（高八寸）、杓（柄長二尺）を飾る。なお、以前は吉向（きっこう）焼、さらにその前には、中国の呉須赤絵や伊万里の大形鉢が使われていたらしい。

台子飾り

さらに、茶杓が一尺三寸ほどで、茶筅は一尺五寸もあり、これで茶を点てるさまは、まるで竹箒を扱っているようで、ユーモラスですらある。また、帛紗（ふくさ）さばきにいたっては、まるで風呂敷のように見えて、思わず笑いを誘ってしまう。ともかく、異様に大形の茶道具の取り合わ

せに誰もが度肝を抜かれてしまう。

お菓子は「西大寺餅」、取り菓子は金銭の「開基勝寶（かいきしょうほう）」を模した「金銭菓（きんせんか）」。これが室町時代の根来塗りの高盆に盛られる。「開基勝寶」とは、あまり聞きなれない貨幣の名だが、皇朝一二銭の一つで、天平宝字四年（七六〇）、銅銭「万年通宝」と銀銭「大平元宝」とともに鋳造された唯一の金銭のことなのだが、これまでほとんど実物を見た者がいないため、永い間、その実在が疑われていた。

根来塗高盤と金銭菓

ところが、寛政六年（一七九四）の四月一九日、西大寺の西塔址から偶然にも発見され、その存在が確認されたのであった。その後、明治一〇年（一八七七）一月、明治天皇の大和行幸の際、この「開基勝寶」が西大寺から献上されてからというものは、まったく人目に触れていないという。なお、明治時代の金工家加納夏雄がこれの模型をつくって、名越弥五郎が鋳造したものが、東京国立博物館に保管されているというのだが、未だに実見するにいたっていない。

平成四年から一〇年ばかり、東京国立博物館の客員研究員の職にあったので、拝見することができたのに、機会をのがしてしまった。惜しいことをしたと思っている。

大茶盛は叡尊上人の遺徳を追慕する茶会であるが、同時にこれまでの大茶盛に使われてきた茶道具などもあわせて並べられているので、その拝見もまことに楽しい。室町時代の朱と黒を

塗り分けた根来塗りの端正な姿をした大形の薬器（茶入れとして使われる）や赤膚焼を中興した人物としてつとに知られる奥田木白が西大寺に寄進奉納した大形の楽焼茶碗（「春夏秋冬五ツ揃茶碗」）なども展観される。

この楽焼きの大茶碗には木白自筆の寄進状が付属する。それによれば、木白自身のかねてからの願望と両親への感謝の意をあらわした奉納であったことが書き記されている。寄進は、天保七年（一八三六）八月二二日のことであった。その大形の楽茶碗とは「玉之絵茶碗」「薄赤茶碗」「黄赤茶碗」「楓葉赤茶碗」「赤筒形茶碗」の五つの茶碗のことで、木白はどうしてこの大形の楽茶碗をつくるのを思いついたのか。おそらくは、何度か大茶盛に参席し、赤楽茶碗が使われているのをつぶさに拝見していたにちがいない。

大茶盛には、ほかのどんな茶会でも味わえない野趣とダイナミズムがあふれている。それにしても、濃い茶席にも薄茶席にもまわりを気にせず座れるようになるのはいつのことか。

これまでの不作法と不勉強を悔やんでいる。

薪御能

発表されたばかりの立原正秋『薪能』（昭和三九年）を手にとったのがきっかけで、能をはじめて観たのはまだ学生の時分であった。演目はもちろん、ストーリーも所作の意味すらわかっていないのだから、とても理解できず、正直にいえば、ただ眺めていただけだった。そのころ、地方出身の友人がいた。京都大学ではインド哲学を専攻し、大蔵流を習っていた。古刹の跡とりとは、そういうものかと思っていた。誘われるままに何度か能を観に行くものの、小説『薪能』のかがり火にも似た男女の情念、そして炎に翻弄されていく恋の行末の方が気がかりであった。不思議なことだが、能を観るたびに、いまなお『薪能』の一節が脳裏をかすめる。「秘すれば花、秘せねば花なるべからず」とは世阿弥の『風姿花伝』の言葉で、「ひめてこそ魅力」。露わにせず極限にまで動きを抑えればこそ美しい、と勝手に解釈し、いかにもわけ知り顔で今年も観ている。

野外能

能、正しくは猿楽能という。猿楽とは「滑稽な物まね芸」のことで、申楽（さる）・散楽（さん）ともいい、もともとは神や仏を慰めるための法楽の芸能である。寺院や神社などの境内、つまり野外で行われていたのだが、室町末期ごろからは、屋内に舞台が設けられ、そこで演能が行われるようになった。

薪の能（『大和名所図会』）

現存する最古の能舞台といえば、京都の西本願寺にある桃山期建築の「北の舞台」がよく知られており、これは国宝に指定されている。この舞台の存在によって、そのころ、すでに「座敷能」が定着していたことがわかる。以前、招かれて見学した西本願寺には、対面所と白書院をはさんで北と南に二つの能舞台があり、「北の舞台」は徳川家康が駿府で愛用した能舞台といい、これが本願寺に移築されたものであるという。

昭和二五年、能の古い格式をそこなわず、しかも大衆にも親しめる能興行をという趣旨から、京都能楽会が平安神宮を会場として野外能を催し、薪能を復活させたのであった。これが平安神宮薪能である。いうま

でもなく、薪能とは、興福寺修二会に付随した宗教行事にかかわって開始したものであった。

だからこそである。薪能の二文字は、とりもなおさず興福寺の薪御能（たきぎおのう）だけをさしていう名称なのである。存外に、こうした事情を知らない人が多い。京都能楽会が、いわば宗家筋にあたる興福寺に遠慮し、これを「京都薪能」と称したのは、そうした理由による。

ともかくも、これが発端となり、鎌倉薪能とか大阪城薪能など、各地に薪能ブームがおこり、現在では、地名や場所を冠する薪能が演能される。その数、全国で約二〇〇か所にもおよぶらしい。そこには、立原正秋の鎌倉薪能に題材をとった小説『薪能』が、あるいはブームに一役かったかとも思える。

能あるいは能楽は、能と狂言の二つをあわせたものをいい、能楽という呼び名は明治期以降のもので、それまでは単に能と呼んでいた。

大和と猿楽

天平勝宝四年（七五二）四月九日、東大寺毘盧舎那仏の開眼供養会が聖武太上天皇・孝謙天皇臨席のもと、文武百官が席を連ねて盛大に執り行われ、さまざまな歌舞音曲が演じられ、奏され、毘盧舎那仏を荘厳した。そこには、はるばる南方から波涛をこえてやってきたチャンパ王国の林邑（りんゆう）楽もあった。

チャンパは、二世紀から一七世紀までインドシナ半島に君臨した王国で、現在のヴェトナム

中部のミーソンを本拠としていた。もちろん、唐伝来の唐散楽も奉納された。唐散楽とは、軽快な動きによる、いわば喜劇的な芸能だったようで、能の源流はこの唐散楽にあるといい、そして、散楽が訛って、猿楽となったとされる。

『枕草子』や『源氏物語』には、「さるごうこと」あるいは「さるごうがまし」との表現があり、それは「滑稽なこと」の意味で使われている。だから、当時、猿楽は「お道化た芸」であったことがわかる。

猿楽が「滑稽な芸」として、民衆の間に支持されて発展する一方で、祈祷を中心とする「呪師猿楽」や「翁猿楽」がうまれ、次第に寺院や神社の法会や祭礼の奉納行事として重用されるようになっていく。室町時代になると、『源氏物語』『平家物語』や『万葉集』『古今和歌集』などの古典や歌謡に題材をもとめた、しかも音楽と舞踊による演劇的な猿楽、すなわち「猿楽の能」が確立する。

能の大成者として知られる世阿弥や金春禅竹は、室町期に活躍した人たちで、室町将軍家や武家・公家・寺社などの援助をうけて「猿楽の能」はいよいよ盛んになる。そのころになると、「猿楽の能」を専門にする者たちによって、同業組合である座が結成され、大和では金春・金剛・観世・宝生、いわゆる大和四座が生まれる。

円満井座（奈良市円満寺(カ)＝現、金春流）＝興福寺に所属
坂戸座　（生駒郡坂戸　＝現、金剛流）＝法隆寺に所属

結崎座（磯城郡結崎＝現、観世流）＝観音寺(カ)に所属
外山座（桜井市外山＝現、宝生流）＝山田寺に所属

こうした四座は、それぞれ春日神社や興福寺など、有力な寺社の庇護のもと、寺社の行事に奉仕し、また活動した。むろん、四座は宗教行事に芸能をもって勤仕する芸能者であった。世阿弥の『花伝書』に「大和国春日御神事に相随ふ申楽四座」とあり、四座は春日社（大宮社と若宮社）の祭礼に参勤し、猿楽を演能した。春日若宮社のおん祭りは、保延二年（一一三六）にはじまるが、当初から猿楽が奉納されたのかどうかはわからない。鎌倉中期以降のことではないかとされる。

なお、金春座は竹田座ともいい、あるいは南大和（十市郡竹田）から南都に移ってきた可能性も考えられる。享保二〇年（一七三五）刊行の村井古道著『奈良坊目拙解』によれば、金春家は豊臣秀吉の庇護のもと、山城国相楽郡狛郷から奈良に移住し、高天町に広大な屋敷と能舞台を賜ったという。金春家の発祥地については、西京とも、南大和の十市郡ともいわれるが、山城国相楽郡がこれに加わってこよう。

その後、金剛・観世・宝生の三座は京都に移住し、戦国期には、大和猿楽四座は戦国大名を新たなパトロンにもとめて地方に下向するようになった。江戸時代になると、幕府が能楽を「武家の式正の楽」と定めた関係もあり、四座は江戸に居を移す。金春家も幕府から江戸屋敷を与えられ、一時は江戸に行くも、大和に知行地を与えられていたこともあり、ついに大和を離れ

なかった。

なお、金剛座の中にあった喜多（北）七太夫が徳川秀忠と家光の愛顧により、喜多流があらたに許され、ここに四座一流の体制がかたまる。そして、幕府から保護を受ける。

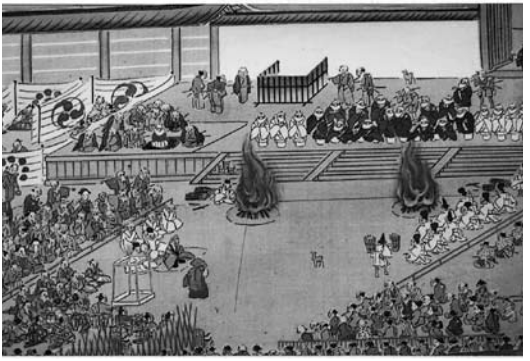
薪御能

薪能は「薪猿楽の能」といい、かつては「薪猿楽」「薪咒師猿楽」とよばれた。現在では、薪を燃やし、その炎の光のなかで演じる能の意味で使われるが、もともとは興福寺の薪能に限っての名称であるとはさきに述べた。興福寺の東西両金堂の修二会にともなってはじめられたので、「興福寺古儀薪能」「薪御能」といった。

興福寺東金堂

「お水取り」で知られる東大寺の修二会はあまりにも有名だが、陰暦の二月初めに国家隆昌を祈願する修二会は各寺院で行われる法会で、興福寺でも平安初期から東西の両金堂で行われていた。貞観十一年（八六九）、東西両金堂の上に、それぞれ三二相と二八相の香華を荘厳する「華供法会」では、薪迎えといって、夜に宗祖と諸神を勧請（来臨を願うこと）するため聖火を焚いた。これが薪能のはじまりに結びつくのかもしれない。

薪を神山から迎え、その薪を燃やすのだが、その際に猿楽衆が咒師（祈祷師）の資格で招福辟邪の所作を演じたといい、薪能はこれにはじまるという。史料（『若宮神主中臣祐定日記』）の上では、建長七年（一二五五）二月のそれが最初で、「薪猿楽」とある。この東西両金堂の法会は、鎌倉期の弘安六年（一二八三）以降は、なぜか行われなくなる。



薪御能図（森川杜園筆）

鎌倉時代以降、興福寺修二会は経済的な理由もあって滞るようになるが、室町時代には、薪猿楽だけがさかんに催行される。またこのころ、修二会とは切り離して行われ、二月二日は西金堂、三日は東金堂、五日は春日大宮社で「翁舞」（「咒師走りの儀」）を金春・金剛・宝生の三座が奉納し、一三日までは、四座が交替で春日若宮社に参仕して演能を奉納したらしい。これを「御社上りの儀」という。

またこの間、場所を興福寺南大門に移して、興福寺衆徒（僧兵）の執行による四座揃っての演能があった。これを「南大門の儀」という。このように、薪能は春日社と興福寺に密接に結びついた芸能であった。

盛大をきわめた薪能も江戸時代に入ると、幕府によ

って興福寺の勢力がそがれるとともに衰退していく。まず、観世流が江戸詰の理由から「薪能御免」となり、三座のうち、二座が交替でつとめるが、出費がかさむこともあって、やがて大和に知行をもつ金春流が主宰するようになる。

江戸時代の薪能は、二月五日の暮れどきに、まず春日大宮社で「咒師走り」の「翁」が、金春・金剛・宝生の三座（現在は金春流のみ）によって奉納された。そののちの七日から一週間は、興福寺南大門の芝で、三座のうち二座による演能があり、二月九日と一〇日は、南大門の芝と春日若宮社の二か所で、二座にわかれてそれぞれ演能の奉納があった。

春日大宮社での「咒師走り」の「翁」には、『十二月往来』『父の尉』『延命冠者』といった常と異なる演出があった。『十二月往来』は、一二か月にちなんだ言葉をシテとツレが掛け合いで謡うもので、『父の尉』と『延命冠者』は翁舞が終わると、シテが父の尉、ツレが延命冠者の面をつけ、天下泰平と五穀豊穣とを祈願するのである。春日若宮社での「御社上り」は「翁」三番能、そして止めが「猩猩」となる。

「翁舞」、つまり式三番（三老人による祝福舞）は、猿楽能に古くから伝わる祭儀的な演目であるから、春日大宮社と若宮社での「翁舞」は、招福神が翁に姿をかえて現れてくるといった古俗と伝承に基づいたものであった。それがやがて芸能化されていく。現在は、「咒師走り」が五月十一日の午後一時、「御社上り」が一二日午後一時から行われる。

復興「薪御能」

興福寺の力が弱まるとともに薪能も衰微する。江戸幕府は「春日若宮おん祭り」と「興福寺薪能」に、毎年五百石ずつ支給してきたのだが、明治期になると、それまで幕府が支給してきた費用も打ち切られ、興福寺薪能は途絶するのやむなきにいたる。

明治二三・二四・二六年と三度にわたって催されたほかは、大正時代にも行われず、しばらく廃絶の状態がつづいた。ようやくにして復興なったのは昭和一八年（一九四三）のことであった。昭和二一年に春日大宮社の「咒師走りの儀」と春日若宮社の「御社上りの儀」が復活し、二七年には、大和四座による興福寺南大門跡での「南大門の儀」も復興する。これらの演能は、これまでは二月に行われてきたのだが、現在は、奈良薪能保存会の主宰で、五月十一と一二の両日に行われている。

薪能が興福寺南大門跡の「般若の芝」（五間四方で三尺ほど土盛りして一段高い）で行われるのには理由がある。もともと、東西両金堂の屋外で行われていたのだが、両金堂の堂衆が主導権争いをおこし、これの仲裁に入った興福寺衆徒が南大門の芝に場所を移すことで決着したことに由来するのだという。

しかし、そうではなかろう。南北朝期以降、実力を蓄えてきた衆徒（僧兵）が薪能興行の主宰権を奪ったというのがことの真相であったにちがいない。衆徒（僧兵）とはいうものの、その実態は土豪であった。南都郊外の古市郷の土豪古市播磨も興福寺衆徒であって、衆徒の棟梁

となり、大和守護代として権限をふるったことを例に引くまでもない。

現在の薪能が、僧兵姿の立会いのもとで行われるのは、そうした経緯をわかりやすく物語ってくれている。だからこそ、今も白い袈裟頭巾で顔を包み、白の着物に水衣（みずごろも）、手に長刀（なぎなた）を持ち、素足に高下駄をはいた僧兵姿の衆徒は、「舞台あらため」を行うのである。これは、芝に設けた檜の舞台の上に敷かれた三枚の奉書紙を二、三回踏む儀式で、薪能がかつては芝の上でじかに行われていた証といえる。芝の湿り具合で、その日の薪能催行を決定するわけで、いかに興福寺衆徒が薪能の興行を支配していたかがわかる。見物席をつくり（鞍掛（くらか）け。木でつくった桟敷）、席料を徴収し、能役者に太夫の称号を与えるのも衆徒であり、薪能の主宰は興福寺でも春日社でもなく、興福寺の衆徒であった。

薪能は「咒師走りの儀」「御社上りの儀」「南大門の儀」が一連をなすものである。なお、南大門は享保二年（一七一七）、講堂から出火した大火により焼失したまま再建されなかった。それにしても、若い時分は学校の勉強はそっちのけにして、手当たりしだいに小説を読んだ。いまの若者は携帯電話にすっかり搦めとられている。

鹿の角切り

板の間に藁を置き、その上に筵を敷いただけの、上田秋成『雨月物語』の「浅茅が宿」のわが家であった。正月には祖母がきまって掛け軸を出し、襖とは名ばかりの破れ仕切りに掛けた。むろん、床の間などはなかった。大黒様や尉と姥、聖徳太子像の掛け軸に、子供心にも、格別な気分を味わうのだが、しばしの間、祖母の講釈につきあわされた。「この神さまはありがたいもの」と教えられた掛け物だけは奇妙なもので、祖母の話も理解できなかった。髪をすべらかしにした、男か女かわからない神さまを中央にして、その左右に鹿と馬に乗る二人の神さまを描いた掛け物で、三人の神が天照大御神と春日大明神、八幡大菩薩であると知ったのは、ずっとのちのことである。はじめて鹿の姿を目にしたのも、鹿に乗る神さまの存在を知ったのも、正月にだけ目にする掛け物であった。そして、この三神の神徳を宣揚する掛け物こそが「三社託宣」なのである。

三社信仰

鎌倉時代に神国思想が勃興するにともない三社信仰がはじまり、室町時代には公家と武家に篤く崇信され、三社の一体化信仰がさかんとなる。江戸時代になると、やがて庶民の間にも普及し、三社をあらわした掛け物を礼拝する信仰が広まる。

三社とは、もとはといえば、伊勢神宮・石清水八幡宮・賀茂神社の三社のことだが、一二世紀半ばごろから春日神社が賀茂社にとってかわり、伊勢・八幡・春日を三社と呼ぶようになる。

三社観の確立には、源頼朝による源氏政権の出現が大きな役割をはたした。鎌倉に鶴岡八幡宮を造営したことからわかるように、武家の源氏は八幡大神を氏神として篤く信仰した。この八幡宮は、康平六年（一〇六三）に源頼義が石清水八幡宮を相模国由比郷に勧請（かんじょう）し、さらに治承四年（一一八〇）に源頼朝が現在の地に遷座（せんざ）したのであった。

源氏政権は、八幡信仰の縁から平氏によって罹災した東大寺の復興につとめ、春日神社と興福寺をも保護した。若宮社創建のころから藤原氏の祖神天児屋命（あめのこやねのみこと）こそ日本国王である天照大神の補臣とする考えが強くなっていた。もちろん、武家は伊勢神宮を尊崇する。藤原氏は武家政権を意識して八幡信仰との連携をはかった。かくて三社観ができあがる。

三社の神徳、すなわち伊勢大神は正直、春日大明神は慈悲、八幡大神は清浄の意味を強調し、これに儒教と仏教、神道の徳目が組み合わさり、それが神道の教説として広まったのが三社信仰であり、いわゆる、神仏習合思想と儒教思想が合体したものといえる。

子供のころの私が不思議にながめていた掛け物こそ、三社神号を書いた「三社託宣」そのものであったが、鹿にのる神が、なぜ春日神社を象徴するのか、これもわからなかった。

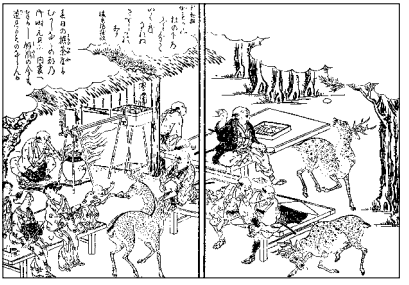
春日神社が、春日連峯の御蓋山の麓に創建されたのは神護景雲二年（七六八）のことで、平城京を鎮護する神社として奈良朝廷の官祭を司り、また藤原氏の氏社として権勢をほこった。創建のときに鎮座した祭神は、藤原氏の氏神である常陸国（茨城県）の鹿島の武甕槌命、下総国（千葉県）の香取の経津主命、祖神である河内国枚岡の天児屋命、そして比売神の四神であった。

藤原氏の招きを受けた鹿島の神は、鹿に乗って常陸国から伊勢国の名張夏見郷、そして大和国の安倍山を経て、御蓋山の麓に応現（影向）したとされる。春日神社の祭神を乗せる鹿は、同社の生い立ちに深くかかわっている。

やがて、春日信仰の進展とともに、春日神社成立の鍵を握るこの説話を象徴化した造形がうまれる。すなわち、鹿島の神が鹿の背に乗る姿を描いた「鹿島立の御影」や、鹿の背の鞍に円鏡を掛けた榊（神木＝春日社では「ひもろぎ」という）の立つ「春日鹿曼荼羅」などがそれで、むろん、創建の説話を具象化したものである。

大垣廻し

春日野の鹿は、背に春日神社の祭神を乗せるところから「神鹿」となり、祭神と同じように



春日にない茶屋（『大和名所図会』）

尊崇を受けてきた。平安時代には、絶大な権力をほこった藤原道長・頼通父子をはじめとする、藤原氏の氏長者の春日社詣、また天皇と皇族の春日社行幸が相つぐが、公卿でさえ途中に「神鹿」にであえば、ひざまずいて拝したという。

春日神社と興福寺は、ともに藤原氏の氏社であり氏寺であるのだが、もともと一体化していたわけではなく、むしろそむきあうほどであった。法相宗の本山興福寺は、春日大明神を「法相を擁護する神」と唱えはじめ、春日神社祭祀への関与をはかるが、祭祀権は藤原氏の権威の象徴として氏長者が掌握していた。やがて、神仏習合思想を背景として、春日神社に仏教色が強まり、春日神社と興福寺は一〇世紀の中ごろに一体化がなり、次第に興福寺の支配するところとなった。自然の成り行きとして、鹿は興福寺の管轄するところとなる。

興福寺では、講衆（興福寺僧侶）、および神鹿と児童の殺害を重罪としていた。これを「三か大犯」といった。そして、この罪を犯した者は死刑に処せられた。その死刑宣告の儀式を「大垣廻し」といった。

大垣とは、興福寺境内の周囲をめぐる築地塀のことで、罪を犯した者は、まず称名寺で拷問の式が行われ、白布の直垂を着せられたあと、馬に乗せられて大垣を三遍引き回され、南大

門の前で興福寺衆徒が断罪宣告を行う。これを「暇の儀」といった。そのあと、南大門から椿井町に下り、東向通り（現在の東向商店街）の大垣に沿って北行し、宿院辻から東に折れて鍋屋町、油留木町を経て押上町のところで京街道に出る。そこから般若寺を通り、大和と山城の国境いの藪の中で首を刎ねるというものであった。

茶の湯の祖として有名な村田珠光ゆかりの、しかも町寺の称名寺で拷問が行われた理由はまったくわからない。

「興福寺略年代記」（『続群書類従』所収）の天文二〇年（一五五一）一〇月二日の条に「大垣廻し」が見え、実際に行われたことがわかる。

奈良子守町仁而、十歳計ノ女、ソラツブテ打テ、鹿ヲ打死之間、シハリ取、大垣廻し断頭云々、二親以下当座ニ逐電、住宅被神（進）発了

これによれば、子守町というところで、わずか一〇歳ほどの女の子の投げた石が当たり、運悪く鹿は死んでしまい、少女は捕まり、「大垣廻し」となった。それだけですまなかった。その親と親族は連座の罪を恐れて逃亡するのだが、興福寺の僧兵（衆徒）はその居宅までも破却してしまった。容赦なかった。まったくむごいことである。

『多聞院日記』天正三年（一五七五）三月二一日の条に、

信長ヨリノ儀トテ神鹿二頭取テ京へ上了、前代未聞ノ珍事、寺社零落大物侘ノ事也、凡ハ三カ大犯ニモ以之為最上於嘆入題目也、惣修一円廃怠、真俗悉相終故也、依何被耀哉、勿

論々々

そして、天正五年（一五七七）四月二一日の条は、

鹿殺一ノ坂ノタクラト云物、大垣廻テ今日断頭了

と記し、信長の「神鹿お召し」に興福寺の僧たちが、おそれおののき、驚愕し、動転する様子が、そして大垣廻しが実際に行われたことがわかる。

「三か大犯」は、子どもの生命を守る一方で、その罪を犯した者は、たとえ年端のいかない子どもでも免れなかった。また、両親や親族までもが連座の罪に問われ、居宅の破壊におよんだのである。悲しく酷い話ではあるが、それほどに「神鹿」は、僧侶や子どもの命と同等に見なされていた。それはまた、興福寺の権力が絶対的で、当時、南都はいうにおよばず、大和一国の行政・警察・司法権を握っていたことを物語っている。

角切り

「奈良の早起き」。むろん、今はそうではないだろうが、また、知り合いに確かめたわけでもないが、奈良町の人びとの朝は早いという。

これにはわけがある。家の前に鹿が倒れていると、罪に問われかねないからであった。そのときには、倒れている鹿を家の前からよその家の前まで引きずっていくのである。すでに寛永年間（一六二四～四四）の寺僧殺害を最後に、「大垣廻し」はさすがにあとを絶ったが、なお

伝説「三作石子詰め」旧跡
（興福寺境内）

奈良町中にその恐怖は厳然としていた。

近松門左衛門の浄瑠璃「三作石子詰め」は、少年三作が過って鹿を死なせてしまい、「石子詰め」の刑にされる話で、もとより史実として確認できないが、鹿の殺傷者への酷い仕打ちを題材にしたものである。なお、「石子詰め」とは、穴を掘って、そこに犯人を埋め、小石を詰めて圧殺する処刑というが、詳細はわからない。

野放しの「神鹿」は、農作物を荒らし、角がかたくたくましくなり、気性が激しくなる秋の発情期は最も危険で、人びとに危害をおよぼすことがあった。江戸期には奈良見物がさかんになり、これにあわせて鹿の被害も多くなる。しかし、すでに奈良の人は鹿の被害に泣き寝入りしなくなっていた。

「鹿の角切り」のはじまりは、江戸初期の寛文一二年（一六七二）のことで、奈良奉行溝口豊前守信勝が興福寺に命じて、興福寺の大湯屋付近に「神鹿」を集めさせ、町奉行立会いのもとで角切りを行ったことにはじまる。興福寺は「神獣を損することよからず」とはげしく抵抗するが、奈良奉行所はこれを押し切った。

鹿の被害もさることながら、「角切り」実行の真相とは、おそらくこうであろう。興福寺は、

興福寺大湯屋

大和一国に対する政務、そして警察権と司法権を掌中にし、絶大な権力を誇ってきた。これの先鋒が、南北朝期以降に勢力を伸ばしてきた、武力を背景にする僧兵（衆徒＝土豪）であった。「三か大犯」は、いわば僧兵の定めた刑法である。

江戸幕府の開府となっても、なお興福寺僧兵が跋扈（ばっこ）していた。そこで幕府は、興福寺から行政・軍事警察・司法権を奪い、奈良奉行に移管させたとするのが実相ではなかったのか。つまり、強制的に興福寺の実権を奪取したとするのが正鵠を射ていると思える。「角切り」は、いわば見せしめであった。

このちち、奈良奉行所は興福寺境内に垣を設け、そのなかで角切りを行ってきたが、やがて町内でも半丸太で格子柵を設け、その中で角切りをするようになる。それまで鹿による被害が甚大であったのか、餅飯殿（もちいどの）町がことにさかんであった。なお、『大和名所図会』にも、

此節鹿に角なく、切かぶあり、鹿秋に至り、常に替り猛くなり、妻鹿を相あらそい、又己が居処の堺めをあらそい、つき合、町々にて牛馬ホ（等）まで、阿やまつ故、寛文十二壬子年八月より鹿の角切り初り

と「鹿の角切り」が寛文一二年八月にはじまったことを記している。

鹿の愛護

角切りは連綿と行われてきたわけではない。春日大社は、明治期には鹿の数の激減、あるいは残酷であるとの理由から大正一四年以降とりやめる。昭和三年（一九二八）に復活するも、再び中止となり、復活するのは昭和二八年（一九五三）のことであった。以来、一〇月中旬の日曜・祝日の五日間、春日大社域に設けられた「鹿苑（ろくえん）」（昭和四年に建設）で毎年行われている。

無事を祈る玉串拝礼のあと、太鼓の音を合図に、勢子（せこ）は逃げまわる鹿の角に「だんぴ」という、竹と縄で作った円い投げ縄を投げかけてからませ、これを引き絞って引き倒し、のこぎりで角をきり落とす。巨体鹿の角で突かれれば、大怪我はまぬがれず、うっかりすると命を落とす危険をはらんでおり、勢子のみならず、観客にも緊張感が走る。

角切り（撮影矢野建彦）

財団法人「奈良の鹿愛護会」が「角切り」を主宰する。これの前身は、明治二四年（一八九一）に春日社内に設けた「神鹿保護会」であった。明治二一年（一八八八）年、奈良県は県立奈良公園を開設し、観光資源に資するため鹿の保護をはかり、これに奈良町と観光業者などの有志が加わって結成した会であった。それはまた、民有地での殺傷を禁止するかわりに、柵や塀を設けて農作物被害を防ぎ、被害には補償することを主旨と

するものであった。これ以前から、民有地での鹿による被害は深刻な問題となっており、住民による鹿捕獲や殺害がおこっていた。春日大社としては無視できるものではなかった。

明治十一年（一八七八）、春日大社からの申し入れによって、堺県（当時、奈良県は堺県）は、神鹿殺傷禁止区域（東は芳山、西は中街道、南は岩井川、北が佐保川）を設け、これ以外の区域における鹿の被害については、春日大社がその責を負うものとしたが、住民からはなお被害を訴え、さらなる対策をもとめる声があがった。そのため、奈良県は明治二三年（一八九〇）、殺傷禁止区域を春日社境内と奈良公園内に縮小せざるをえなかった。

しかし、春日社境内と奈良公園内の埒外に出る鹿については、いわゆるこれまでの「神鹿」ではないと解釈されたところから、鹿の捕獲・殺害があいついだ。こうしたことから、明治二四年に春日社を中心とした有志によって「神鹿保護会」が結成されたのであった。

昭和三二年（一九五七）、「奈良の鹿」は天然記念物に指定される。昭和二五年（一九五〇）に定められた文化財保護法では、所有者を明確にしない文化財については、「管理者」を指定するのが通常なのだが、「奈良の鹿」の管理者は指定されなかった。これがまた、農作物の鹿害防止や補償問題の解決を厄介にさせてきた。

もはや、奈良の鹿は、かつての春日神社と興福寺の「神鹿」ではない。「鹿の愛護会」が実際の保護にあたっているのが実情である。なお、民間でつくる「奈良の鹿市民調査会」が鹿の実態調査などの活動を地道につづけている。現在は約一〇〇〇頭という。

春日若宮おん祭り

たしか勤めはじめた年のことであった。「今日は、おん祭りの日やから勝手に半休しても休んだことにはならへんで」といわれ、公務員でも大手を振って勝手に休めるのかと半信半疑だった。そういえば、生まれ故郷にある鎮守天神さんの村祭りの日も半休だったと思い出し、都会でもあるのかと少しおかしかった。さまざまに意匠を凝らした時代行列を見物したり、あるときには一の鳥居そばの影向の松での芸能を楽しんだり、ある年には餅飯殿町にある大宿所での行事を見学したりした。ところが、うかつにも肝腎なことを見逃していた。深夜に若宮神が「姿をあらわし」、御旅所の行宮に遷る「遷幸の儀」を一度も目にしていなかったことに気づいたのである。もちろん、神のお姿を目にすることなどはとてもかなわない。漆黒の闇に包まれる秘儀は厳粛そのものであった。これこそ神話の天孫降臨そのものではないのかと、その感を深くしたことがある。

おん祭り

奈良ではこういう、「祭りのしまいはおん祭り」と。

大和の祭りの最後を飾るにふさわしく、盛大に行われるのが春日大社の若宮祭である。というよりむしろ、「おん祭り」の呼び名で親しまれている。「おん」とはいかにも大層だが、「御祭り」がもともとなのであろう。

春日若宮社の創建は、保延元年（一一三五）二月二七日の若宮神鎮座にはじまり、この年に鳥羽上皇の春日社御幸があった。若宮祭は、その翌年、官命によりはじまる。その際、興福寺別当・皇后宮・摂政関白家の藤原忠実・忠通親子らが幣帛を奉献しており、いわば国祭に準じた祭礼であった。当初は九月一七日に行われた。その後、室町期の応永末年に十一月二七日と改まり、さらに明治期に一二月一七日と定まり、今にいたっている。

この祭りは興福寺が主宰してきたもので、境内の東側に御旅所を設け、そこに若宮神をお遷しする神事である。興福寺の別会五師（教学執事）が興福寺別当のもと、その年の流鏑馬を定める「流鏑馬定」から若宮祭の準備が開始する。これは、流鏑馬一〇騎を大和国中の武士に割り当てたことに由来するといい、江戸時代まで六月一日に行われていたが、明治期に入って途絶し、復活するのは昭和六〇年のことであった。

この祭礼の見所となっているのは、「お渡り式」といって、行宮（御旅所）に遷幸した若宮神のもとに社参する時代風俗姿の行列にあろう。なかなかの壮観である。これを風流という。

一行に加わっている芸能集団や武士集団によって、田楽や流鏑馬などの芸能・武芸が奉納されるが、これも祭礼の根幹をなしている。興福寺によって創始された祭りであるところから、かつては大和国中での殺生が禁じられ、住民には謹慎が命ぜられたほどであった。

一二月一七日の深夜、若宮神を御旅所（おたびしょ）の仮御殿へ遷す「遷幸の儀」がクライマックスとなるが、これよりさき、一〇月一日の「若宮おん祭り縄棟祭」から事実上はじまっている。これは奈良市大柳生町にある式内社夜支布（やぎう）山口神社の氏子である片岡家の世襲で行われてきた祭りである。

大宿所祭（「南都名所図屏風」）

この日の午前中に松五二本と青竹六本をかつぎ、「春日神社縄棟祭御用」の札を押し立てながら三里半の山道を降りて御旅所の建つところに入る。そして、御旅所の仮御殿が建てられる場所に松を植え、これを青竹で支え、春日造りの仮御殿がつくられる。ここに若宮神がお遷り、つまり降臨するのである。それだけにとりわけ重要な聖地となる。なお、夜支布山口神社は、かつて大柳生春日神社といわれ、現在の春日大社の元宮とも考えられてきた。その関係で、松と青竹の奉仕が行なわれてきたのかもしれない。

そして、おん祭りはいよいよ、一二月一六日の市内餅飯殿町にある大宿所（旧遍照院（へんじょういん）址）において、祭礼の願主役・御師役・

馬場役をつとめる大和士（大和国在地の大和武士）が、神事奉仕にあたっての精進潔斎を行う大宿所祭、そして若宮社と春日大宮社での宵宮祭、さらに、一七日の「お渡り式」へとつづき、それが済むと、深夜に若宮神神霊が若宮社にお還りになる「還幸の儀」があり、翌一八日の御旅所仮御殿前で行われる「後宴能」の奉納で結びとなる。

若宮社

春日の杜には、二つの社殿が建つ。つまり、本社（大宮）が南を向くのに対して、若宮社は御蓋山を背に西面して建っている。あとにできる若宮社の方が遥拝するにふさわしい景観をなしているように思える。

それはともかく、春日神社は平城京遷都にともない、国家の祭祀を行う場として、常陸国の鹿嶋神・下総国の香取神・河内国の枚岡神、そして比売神の四神を迎えて、神護景雲二年（七六八）に創建され、また永く藤原氏の氏神として隆盛を誇ってきた。そして、春日神杜の祭礼が三月一三日に行われる春日祭（申祭）であり、これが創建時ごろから行われていたことが『日本文徳天皇実録』や『日本後紀』『日本三代実録』などの記載からわかり、この祭りこそ春日神社にとって最も重要な祭礼なのである。しかし現在では、若宮

申祭（「南都名所図屏風」）

祭の規模と華美さにおよぶべくもなく、若宮祭の盛大さに押しやられた観がある。

一方、若宮社は保延元年（一一三五）、悪疫流行を抑えるための祈祷と五穀豊穣を祈願するため、関白藤原忠通によって創建されたと伝える。しかし、大和国の領主化をはかる興福寺が、神仏習合思想の時流を利用して、興福寺と春日神社との神仏一体化、あわせて春日神社祭祀の主導権をにぎって、実質的な支配を目論むのだが、春日祭儀の祭祀権は藤原氏の権威の象徴として氏長者（うじのちょうじゃ）の固守するところであった。そこで興福寺は、摂関家藤原氏に強く要請し、興福寺の鎮守社として若宮社を創建し、春日祭に対応すべく若宮社の若宮祭を創始したのが実際であろうとされている。

なお、春日神社創建後ほどなく、神仏習合思想（本地垂迹説）の影響により、社頭に神宮寺が建立される。伝説では弘法大師の創建と伝えるが、それはともかく、そのころに建った寺院であろう。しかし、この寺院はあまり発展しなかった。なぜかわからない。そして、春日神社と神宮寺の関係、さらには興福寺と神宮寺の関係も明らかではなく、まったく模糊（もこ）としており、不可解というほかはない。

うっそうと木が茂り、蒼古としている御蓋山には、春日神社が創祀される以前、この山を崇敬する土地の人たちによって神がみが祀られていたふしがある。御蓋山麓に鎮座する神は、国家の祭祀を司る春日社の一社だけでなければならない。ところが、いかなるわけか『延喜式』「神名帳」には、「春日神社」「春日祭神四座」と並記される。

春日祭神四座とは、春日神社創建の際にお迎えした四祭神を指すのはいうまでもない。それでは春日神社とは何か。これこそが春日神社創建以前に、地元の人びとに祀られていた地主神（土地の神）の榎本神（えのもとしん）であろうと考えられるのだが、なお検討する必要があろう。榎本神は現在、春日大社の摂社となっている。

「おみゆき」

地主神の榎本神にかぎらず、御蓋山には雨乞いにかかわる龍神信仰があった。また、春日神社に、忿怒（ふんぬ）像の赤童子（あかどうじ）がしばしば姿を現わすようになる。『春日権現験記絵』や「春日曼荼羅」などの絵巻物や絵画には赤鬼のような姿をした赤童子が描かれ、これは御蓋山の雷神をあらわすものと思える。

榎本神といい、雷神といい、御蓋山には地元の人たちによって、古くから神がみが祀られていたのだが、春日神社の創建によって、つまり春日祭神に神山を奪われ、姿を隠していたとみるのが妥当な解釈であろう。なお、春日大社南門前の地面に覗く岩（木の囲いの中）が赤童子の現れ出たところであるとの伝承がある。

平安後期になると、これまで絶大な権力を誇った藤原氏の栄華にかげりが見えはじめ、春日神の霊力も次第に力を失い、これに折から打ちつづく天変地異や凶作、さらに疫病の流行が拍車をかけた。人びとは、新たな精気みなぎる力強い霊力の神を切望していた。こうして、再び

若宮仮御殿（『春日大宮若宮御祭礼図』）

御蓋山に蘇えった地主神たちの神徳をも取り込んだ性格をもつ神こそが若宮神の実相ではなかったのか。ちなみに、赤童子は雷神であり、龍神の化身である。

若宮神は、一七日の深夜、午前零時過ぎに現われ、若宮社から御旅所に遷幸し、翌一八日のやはり深夜、午前零時までには常の住まいである若宮社にお戻り（還幸）になる。二四時間を超えない。

一七日の午前零時近くになると、あたりの明かりのすべてが消され、周囲は物音ひとつだにしないしじまに包まれ、八〇〇年以上もつづいてきた「秘儀」が漆黒の堆積する闇の中で行われる。突如として、若宮社本殿の方から「ヨォー、ヨォー」との声（警蹕）が闇を裂いて春日の杜に響きわたる。警蹕は清浄無垢な白衣に身を包む大勢の神職たちの発する声で、手には榊の枝を捧げもつ。神職たちがつくる幾重もの人垣に護られながら、ついに若宮神がその姿を現わす。神は人垣の真ん中にいるはずだが、もちろん姿を拝することなど叶わない。

若宮神は、まるで小山のような白い「かたまり」だけが闇間に揺れ、しかもうごめきながら現われる。まさに神話「天孫降臨」の世界を連想させるふさわしく、きわめて厳かなもので、

こうした「神の現われる」神事が行われるのは、この春日若宮祭の「遷幸の儀」だけかもしれない。神職のつくる人垣のあとを、楽人たちが雅楽（慶雲楽）を奏しながら、御旅所までお供をする。

お渡り式

神霊が祭礼に加わる多くのお供をしたがえ、御旅所に「神幸」することを、一般には「お渡り」というが、春日若宮おん祭りでは、すでに御旅所に「おみゆき」した若宮神のもとへ、芸能集団や祭礼に加わるさまざまな人びとが社参する行列（風流）のことをいう。

現在の「お渡り式」は、さまざまに意匠をこらした平安期から江戸期にかけての時代風俗姿の行列が、旧興福寺境内で準備をととのえ、午後一時に祝いの御幣を先頭にして、奈良県庁前から登大路を西に下り、油坂から南に進み、ＪＲ奈良駅を経て、三条通りを東行し、「一の鳥居」を入ったすぐ南側にある「影向の松」を右に見ながら、午後三時までに御旅所にいたる行程となる。

鎌倉期の風流行列は、「一物（ひとつもの）（五騎）・細男（せいのお）・田楽・競馬（くらべうま）・流鏑馬（やぶさめ）・相撲・勝負舞」であった。ついで鎌倉時代の安貞二（一二二八）年のそれは、「祝（いわい）・御幣（ごへい）・舞人（まいびと）・日使（ひのつかい）・陪従（べいじゅう）（楽人（がくじん））・巫女（みこ）・細男（せいのお）・猿楽（さるがく）・馬長（ばちょう）（五人）・競馬・流鏑馬（やぶさめ）・田楽（でんがく）」であり、室町期の寛正六年（一四六五）では、「巫女・伶人・細男・四座猿楽・一物造物・流鏑馬」の順であった。

現在は、まず日使（騎馬）が先頭をつとめ、その後にお供の陪従（楽人二人）がつづく。

日使とは、この祭りを創始した九条法性寺関白藤原忠通が、例年どおり興福寺の食堂の前まで出仕したところ、急に体調を崩し、ために着用の装束を陪従の伶人に与え、伶人を「この日の使い」として臨時の奉幣使に指名したところからその名があるという。したがって、日使は束帯姿で、頭には冠の巾子（こじ）に藤のつくり花を挿している。

日使のつぎに春日大社の巫女、そして細男座の六人がつづく。このあとに猿楽座と田楽座の芸能者が徒歩でつづき、ついで競馬の馬・流鏑馬の弓矢持ちと的持ち・射手児（いでのちご）・揚児（あげのちご）・随兵（ずいひょう）が、そして大和士が参勤した姿をとどめる騎馬姿の武将がつづき、最後に江戸期に郡山藩と高取藩の大名行列がこれに加わった例にならう大名行列となる。総勢で五百人にもおよぶ大行列はまことに壮観の一言につきる。

風流の行列が春日大社の「一の鳥居」を入ってすぐの「影向の松」にいたると、芸能に無縁の多くの行列は、そのまま通り過ぎて御旅所の控え所まで進む。ところが、陪従・細男・猿楽・田楽の芸能の一行だけは、松の前にとどまり、松に向かい芸を披露したのちに御旅所に参るのが習わしとなっている。これを「松の下の儀」という。この芸能奉納は、御蓋山の神がこの松に降臨し、翁の姿で万歳楽を舞ったという故事にもとづく所作と伝える。

影向（ようごう）とは、神や仏が一時的にその姿を現わすことをいう。『春日権現験記絵』には、春日大明神が松の枝のある中空で舞っている姿が描かれる。なお、能舞台の鏡板（かがみいた）に描かれる老松は、

松の下の儀
（『春日大宮若宮御祭礼図』）

この春日影向の松に由来するとする解釈もあるのだが、なお考証すべきところもあるので、結論をいそぐこともなかろう。

「松の下の儀」といい、御旅所での芸能奉納といい、おん祭りには、芸能奉納神事の色彩が強く感じられる。まさに秋の穣りを寿ぎ、神に感謝を捧げる芸能である。だから、おん祭りは秋の収穫祭でもあり、若宮神は農業神ともいえよう。

大和の国を挙げての祭りを盛大化するのに大きな役割をはたしてきたのが興福寺の衆徒であり、その代表幹事（別会五師）が興福寺別当のもと、実質的に執り行ってきた。彼らは願主人と呼ばれ、主宰者として流鏑馬を奉仕してきた。それだけに、「流鏑馬定」は「御祭礼事始」として重要な儀式であった。

今も「おん祭り」に学校や会社が休みなのかは知らないが、ゆとり教育などといって、土曜日を休みにするぐらいなら、なにも「おん祭り」にかぎらず、各地にはそれぞれの鎮守の祭りがあるのだから、その日を休みにすべきであろう。それが教育というものだろう。

薬師寺花会式

入試問題には毎年のように頭を悩ましている。ある年、「凍れる音楽」を答えさせようと思いついた。米国人アーネスト・フェノロサが薬師寺東塔の美しさをたたえた言葉との思いがしみついていた。フェノロサは明治初期に政府の招きで来日し、明治一七年の夏、のちに東京美術学校の初代校長となる岡倉天心と法隆寺を訪れ、「扉を開ければ仏罰立ち所にいたって大地奮い寺塔崩壊する」と、かたくなに拒む寺僧を説き伏せ、二百年以上もの間、静かに眠っていた夢殿を開けさせ、数世紀もの間、誰の目にも触れなかった長い白布で巻かれた秘仏救世観音像をついに白日のもとにした、その人である。しかし、よくよく調べてみるとフェノロサの言葉ではなかった。出所不明の言葉を使うわけにはいかず、問題をあきらめた。その後、ある美術史家の言葉と知った。それにしても、「建築は凍れる音楽」とは、震えがくるほどの名言ではないか。まさに薬師寺の東塔にこそふさわしい。

春つげる声明

年があらたまると大和の各寺院では、国や社会、そして人びとの犯した罪過を僧侶たちが国や一般の人びとにかわって、薬師如来や観音菩薩、吉祥天などに懺悔し、あわせて国家安穏と五穀豊穣、そして人びとの豊楽を祈る法会が行われる。これを悔過法要という。正月の法会が修正会、二月のそれが修二会である。

たとえば、正月一日から七日にかけて行われる法隆寺金堂の吉祥悔過法要は修正会であり、東大寺二月堂のお水取り（十一面観音悔過法要）が修二会にあたる。ちなみに、お水取りは陰暦を陽暦に配して、現在は三月一日から行われている。

薬師寺金堂

修正会も修二会も国土安泰と五穀豊穣を祈願する行事であり、ことに正月の修正会は金光明最勝王経を講じ、その利益を賛美するところから最勝会ともいう。宮中での御斎会にあたる。御斎会とは、正月八日から七日間、宮中に僧侶を招いて大極殿で金光明最勝王経を講じ国家安穏を祈願するもので、年頭にあたって行う国家の重要な年中行事であった。

悔過法要については、『続日本紀』の神護景雲元年（七六七）春正月の条に、つぎのようにある。

勅　畿内七道諸国　一七日間各於国分金光明寺　行吉祥天悔過之法　因此功徳　天下太平
風雨順時　五穀成熟　兆民快楽　十方有情　同霑此福

ここからわかるように、称徳天皇は、この日、勅(ちょく)(みことのり)して、国家安泰・五穀豊穣・万民快楽を祈願するため畿内七道の国分寺をして「吉祥天悔過之法」を勤行(ごんぎょう)せしめた。いわゆる「金光明最勝王経大吉祥天品」によって、昼に金光明最勝王経を講じ、夜に吉祥悔過の行法を行ったのであった。

南都の西郊、西ノ京にある薬師寺では、三月二五日から四月五日にかけて、恒例となっている「花会式」がある。薬師寺金堂内を色とりどりの盛大な花で埋めつくし、ご本尊の薬師如来を美しくかざって鑽仰(さんぎょう)する。これは薬師寺の修二会であり、薬師悔過の法要であるところから、以前は二月三日に行われていた。

導師の陣頭指揮によるリズミカルでダイナミックな薬師悔過の声明(しょうみょう)が堂内に響きわたれば、大和はいよいよ春爛漫を迎える。

花より団子

薬師寺は、天武天皇九年(六八〇)、皇后(のちの持統天皇)が天武天皇の病気平癒(へいゆ)を祈って、藤原京にほど近い飛鳥川の西岸（現在の橿原市木殿）に造営を着手したのにはじまる。工事半ばにして、天皇は朱鳥元年（六八六）に崩御(ほうぎょ)する。皇后は亡き天武天皇の遺志を継いで造営を

すすめ、文武天皇二年（六九八）に落慶する。

ところが、宮都が元明天皇の和銅三年（七一〇）三月に藤原京から平城京に遷ると、やがて旧都に広壮な伽藍を誇っていた諸大寺も新都にうつされた。薬師寺も飛鳥寺（のちの元興寺）や大安寺などの大寺院とともに現在の地に移転したのであった。養老二年（七一八）のことである。

大和の寺院には、じつにさまざまな年中行事があるが、その中でもひときわ華やかな雰囲気をもっているのが薬師寺の花会式であろう。修二会がなぜ花会式の美称で親しまれるようになったのであろうか。いうまでもないことだが、ご本尊の薬師如来をあざやかに彩る花ばなで荘厳することに由来する。

花会式のご本尊薬師如来坐像
（撮影後藤親郎）

そのおこりは、平安時代の嘉承二年（一一〇七）、堀河天皇が皇后の病気快癒を念じ、薬師如来に祈願したところ、ほどなく全快する。霊験を得て本復をはたされた皇后は、梅・桃・桜・山吹・椿・牡丹・藤・菊・杜若・百合の一〇種類の造花を采女に命じてつくらせ、これを一二の花瓶に入れ、大きな台に盛り、年ごとの薬師寺修二会に際し、薬師如来の宝前に献じて堂内を荘厳したと

いう。そして、これ以後、薬師寺の修二会には同じ花を供えるようになったというのである。これにちなみ、薬師寺では毎年の二月三日に献花の法会が行われてきたのであった。

花会式と修二会は、それぞれちがう別の法会であり、いつしか合わさって一つの行事になったとする解釈があるが、行法の次第などからみて、やはり花会式は修二会の別称であろう。もともと寺院で行われる修二会では、ご本尊を美麗に飾りつけるのに、お供えの壇供（だんく）の餅と花は欠かせない。薬師寺の修二会は、荘厳の花が際立って盛大化したために花会式の美称の方が喧伝されたというべきであろう。

余談だが、壇供の餅についてはこんな話がある。花会式が終ると、お供えの壇供（餅）や花は会式の世話をした人や近隣の人びとに配られる。いわゆる「お下がり」は「ご利益あらたかなもの」として大切に扱われるのだが、中には「花をいただくより壇供の方がいいのだが」と、つい本音をもらす人もいたらしい。つまり、「花より壇供」となるのだが、これが転じて「花より団子」になったというのであるが、はたしてどうだろうか。

もっとも、室町時代後期の連歌師山崎宗鑑（一四六五～一五五三）が編んだ『新撰犬筑波集』には、

花よりも　団子とたれか　岩つつじ

の句がある。どちらが「本家」かの詮索は野暮というものであろう。

薬師悔過

修二会、つまり毎年の二月に行われる法会が修二会で、かつては薬師寺も東大寺や法隆寺も二月一日から行ってきた。ところが、太陽暦の採用もあるのだが、陰暦には厄介なことに閏年がある。かりに閏二月であれば、二月が二回来ることになり、法会執行月の決定を迷うことになる。法隆寺の修二会は、二月一日に西円堂で行われ、三日夜の鬼追い式で結願日を迎えるが、東大寺の修二会は三月の一日から二月堂で行われる。

薬師寺の現在の修二会は、盛大な献花を中心とする花会式の方に趣向していることもあって、三月三〇日から四月五日までの間で行われる。これは江戸時代の元禄年間ごろに定まった日程とされる。

花会式では、この七日の間、六時の行法といって、ご本尊薬師如来にお祈りする薬師悔過が行われる。これを昼夜六時の勤行という。六時とは一日を六つに分け、すなわち晨朝（午前四時）・日中（正午）・日没（午後四時）・初夜（午後八時）・半夜（午後十時）・後夜（午前三時）のそれぞれに行う六度の悔過作法のことである。日中・日没を午後二時から、初夜・半夜は午後六時から、後夜・晨朝は午前三時から、それぞれ二時間にわたって薬師悔過のおつとめ（勤行）がある。後夜と日中、初夜には大導師作法がある。

悔過法は、「三宝礼・唄・散華（初夜梵音と後夜錫杖）・咒願供養・嘆仏（讃仏）・五体投地念礼・発願・請影向・如法念誦・大懺悔・秘密加持誓願」の次第で行われる。とりわけ、国家

安泰・五穀豊穣・万民快楽を祈願する「祈請諸願」と国家と衆生の罪業を懺悔する「大懺悔」が重要な行法であることはいうまでもない。

行法する僧侶たちを練行衆といい、同じ宿坊に参籠し、俗塵を断って精進潔斎する。この間、もちろん寺外に出ることなどは許されない。練行衆は、大導師（一人）・時導師（三人）・咒師（一人）・堂司（一人）・平衆（四人）のあわせて一〇人からなり、このほか金堂の内外や練行衆たちの世話をする堂童子二人と童子四人がこれに加わる。行法を総括するのが大導師で、進行を取り仕切る世話役が堂司、邪神を払い善神をお迎え（勧請）するのが咒師の役割である。

奏楽とともに導師が金堂内に入り、礼拝ののち、一旦、堂外に出て、南大門の前の薬師寺を守護する鎮守八幡社（休ケ岡八幡社）に参拝し、再び入堂する。そして、唄・散華（初夜は梵音、後夜は錫杖）のあと薬師如来に帰依を誓う五体投地念礼があり、祈請諸願と悔過文朗読、すなわち大懺悔へと行法は進む。

この行事を異様な雰囲気に演出しているのは、なんといっても夜七時からの初夜の行法、つまり「咒師走りの秘法」であろう。大導師の作法の最中に突然堂内の明かりが消えると、真暗闇の堂内に法螺貝と太鼓、鐘の音が鳴り響くなか、頭巾をかぶった咒師が利剣を双手にかざし、あるいは三鈷鈴を振り鳴らし堂内を駆けまわるさまは、見る者をして、まさに幻想的にして神秘な世界に誘う。

鬼追い式

四月五日は、七日間にわたった花会式の最後の日、つまり、薬師悔過行法を締めくくる日となる。堂童子が練行衆に香水を差し出し、厄除けの護符である牛王宝印を練行衆の額に押しつければ、いよいよ結願となる。そしてこの日、金堂内でのすべての行法が終了すると、そのあとに鬼追い式が行われる。

午後三時、本坊に集まった三様の鬼たちは、好物の人肉になぞらえた高野豆腐を肴に大盃を傾けながら夜の訪れを今かいまかと待つという。やがて、堂内はもちろん、薬師寺境内の灯明のすべてがすっかりかき消され、法螺貝と太鼓、鐘の音が一斉に鳴り響きわたると、このときを待ちかねていたように、黒鬼(父鬼)と青鬼(母鬼)、赤鬼（子鬼）の三鬼が燃えさかる松明を振りかざしながら勢いよく堂内に飛び込んでくる。

鬼は法螺や太鼓の大音声にさらに煽られるように、ますます荒れ狂い、「ヤー、ヤー」と大声で叫びながら堂内を暴れまわる。そこへ鉾を持った毘沙門天があらわれ、鬼たちを法力をもって降伏させ、ついに鬼は堂内から逃げ去り、鬼追い式は幕をおろす。

鬼追い式（撮影後藤親郎）

以前は、鬼は燃えさかる松明を見物人にむかって投げたりしていたが、怪我人の出る恐れに配慮して、最近では行われなくなった。

ところで、花会式の名の起こりとなった一〇種一二瓶の造花は、以前は絹をその材料としていたが、現在は紙でつくられる。造花といっても、花会式に用意されるのは半端な数ではない。たとえば牡丹と菊は、それぞれ一二〇本、梅と椿にいたっては三〇〇本をはるかに超える。自動車のない時代には、藁筒に花を挿し、天秤棒を担いで寺と家とを往復した。

鬼追い式（撮影前川敬）

以前は造花をつくる家といい、修二会の費用といい、その翌年の負担者を第五夜目の初夜に決めていた。初夜行法中に、四か郷、すなわち五条・六条・七条・九条のそれぞれの郷民が金堂に参集し、堂司による「荘厳差定の義」が行われた。その席で経済的に余裕のある者を選び、翌年の費用負担者が決定されたのであった。指名を受けた者を荘厳頭という。その家の家長は、一か年は別火（べっか）して斎戒精進しなければならなかった。

現在は形式化して、その名残りだけを今はとどめている。なお、四か郷とは、薬師寺の寺領（三百石）に所在する池水の恩沢を受けている村のことをいう。

現在、造花は薬師寺がとくに委嘱している二軒の家でつくられている。菩提山町の橋本家と西ノ京の増田家が、もっぱらその調進の役をつとめる。かつて橋本家は薬師寺の末寺であったといい、増田家は薬師寺の寺侍であったという。その縁によって、花づくりを担当しているということである。橋本家が梅・椿・牡丹・山吹・藤・菊の花をつくり、増田家は桃・桜・百合・杜若の花をつくる。

花をつくる準備はすでに半年前の材料調達からはじまり、しかも一本ずつ丹精こめた手づくりであるため、まさに手間暇のかかる仕事である。花と葉を染めるのには、たとえば赤色は蘇芳と紅花、黄色は梔子、茶色は黄蘗などの薬草をつかった草木染め法による。

花会式が終了すると、荘厳具の壇供の餅と造花は信者や近在の人たちに配り分けられ、ことに造花は、箪笥の奥に虫除けとしてつかわれた。

花会式の行われる期間中、金堂前に設けられた舞台の上では、能楽や舞楽・献茶などが行われて、ご本尊薬師如来に奉納され、春の西ノ京は一段と華やぎをみせる。

「凍れる音楽」の言葉の主はフェノロサではなかったが、薬師寺を訪れて金堂の薬師三尊像を拝して興奮を隠しきれず、「この尊像を目のあたりにしただけで日本にきた目的は達せられた」と絶賛している。

当麻寺の練供養

おさな子にとって、寝床で聞く母親の子守唄と昔ばなしほど、心安まるものはない。母の愛に抱かれ、やがて心地よい眠りに誘われる。早くに父母と離れて暮らすようになった私は、母の子守唄をまったく知らない。かわりに祖母からは毎晩のように「とんとむかし（昔ばなし）」を聞いた遠い記憶がある。今でもいくつかの話の筋道は諳（そら）んじている。幼くして母と死別した中将姫（ちゅうじょうひめ）は、継母（ままはは）の酷（むご）い仕打ちにも慈悲深い心を忘れず、やがて当麻寺に入り尼になる話を「とんとむかし」に祖母から聞かされていたせいであろうか、関西にきてはじめて訪ねた寺が当麻寺であった。閑静なこの寺を抱く二上山（ふたがみやま）の姿はことのほか美しいが、山内に漂う何ものをも束縛しない穏やか空気はなおいい。以前、当麻寺中之坊の山門が落成し、その落慶法要に招かれたことがある。三重塔を霞ませるほどに舞い散る桜吹雪は、蓮花と桜花と、花こそちがえ、匂うがごとくの散華（さんげ）となった。

当麻寺の創建

当麻は、二上山の東のふもとにある。

この山は、奈良県葛城市当麻町と大阪府南河内郡太子町にまたがり、葛城と金剛の山並みが北に終えようとする北端にある。北に穴虫峠、南に竹内街道が走っているように、大和国と河内国とを結ぶ交通の要衝として早くから開かれたところであった。そして、ここは当麻氏一族の本貫の地であり、当麻寺はその氏寺として、当麻氏によって創建された寺院であった。

この寺は、かなりの規模の伽藍を構えながら、しかも金堂内に安置される根本本尊弥勒菩薩の塑像や四天王の乾漆像、さらには東西に並び立つ三重の双塔など、いずれもが奈良時代のものであるにもかかわらず、なぜか創建に関する記録が見られないのは、不思議なことで、まことに異例なことといわざるを得ない。なお、足をとめる人とて少ないが、金堂前にある石灯籠（白鳳期）は、現存最古とされる。

開山を語る史料がないとはいえ、『建久御巡礼記』が当麻寺の創建を伝える最も古いもので、これは鎌倉期の建久二年（一一九一）、興福寺の僧実叡が東大寺や春日社など大和国の一四の寺社を巡礼した際の記録であり、これと『大和志料』が採録する弘長二年（一二六二）の「和州当麻寺極楽曼荼羅縁起」や寺伝などをあわせ考えると、当麻寺の前身は、推古天皇二〇年（六一二）、用明天皇の皇子麻呂子親王が、異母兄の聖徳太子の教えにしたがって、河内国に万法蔵院禅林寺を建立し、金堂に弥勒菩薩を奉安したことにはじまるらしい。麻呂子皇子は、用明

天皇と葛城直磐村の娘広子との間に生まれた皇子であった。

その後、壬申の乱（六七二）に功名を立てた当麻真人国見が、天武天皇九年（六八〇）に、河内国から現在の地に移したと伝える。昭和三二年（一九五七）から行われた曼荼羅堂の解体修理の際、白鳳期の軒丸瓦が出土したことによって、はたして、この寺の草創が七世紀末までさかのぼることが確認されたのであった。

当麻氏の勢力がどの程度であったのか、くわしいことを史料は語ってくれない。しかし、天平宝字二年（七五八）に即位した淳仁天皇の生母は、当麻真人老の娘山背であったし、当麻真人治麻呂の娘は、嵯峨天皇との間に潔姫を産み、その潔姫は藤原良房に嫁して、明子を産んでいる。明子は清和天皇の生母であり、文徳天皇の皇后であった。

こうしたことからみると、政治の舞台に華々しく登場してはこないが、当麻氏一族はかなりの勢力をもっていた氏族であったことに疑いはない。ならばこそ、他の有力豪族の寺院建立にならって、この地に氏寺の当麻寺を創建できたのであった。

曼荼羅堂と浄土信仰

当麻寺は、まず金堂と講堂が建てられ、金堂に少しおくれて東塔が、ついで奈良時代後期から平安時代初期にかけて西塔が建立された。こうして、いよいよ伽藍の全容が整う。南に東西両塔が左右に並び、金堂と講堂が中軸線上に南面して建つ伽藍配置は、東大寺のそれにまった

く同じ形式である。

当麻寺は、もともとは南都六宗の一つである三論宗（さんろんしゅう）の寺院であり、金堂がその根本堂であった。ところが、現在は阿弥陀三尊を中心に西方極楽浄土の世界をあらわす当麻曼荼羅を本尊とする曼荼羅堂が本堂となっていて、ここが当麻寺信仰の中心をなしている。

金堂と講堂が南面するのに対し、この曼荼羅堂だけはなぜか東を向いて建っている。これは明らかに西方極楽を説く浄土教の思想を反映したものであって、あとから建てられたお堂なのである。それは、当麻寺の信仰が時代とともに変容していったことを物語っている。

昭和三二年（一九五七）から四年間にわたって行われた解体修理の結果、これまで奈良時代の建立と見られていた曼荼羅堂は、平安初期に建立されたことが明らかとなった。さらに、現在の堂に改造されたのは仁治年間から寛元年間にかけての時期（一二四〇～四七）と考えられていたが、これも永暦二年（一一六一）銘の棟木（むなぎ）が発見されたことによって、約八〇年もさかのぼる平安末期であることも確認されたのであった。

寺の由緒を語る当麻寺縁起によれば、曼荼羅堂の建つ場所には、もともと千手堂があり、堂

当麻寺曼荼羅堂と二上山

内に千手観音像が祀られ、そこに蓮糸曼荼羅が奉懸されていたと語っており、曼荼羅堂の前身は千手堂であった。そして、この曼荼羅こそは、中将姫が蓮糸で織りあげたといわれる綴織当麻曼荼羅（国宝）である。

ところで、曼荼羅堂が解体修理されたとき、曼荼羅をおさめる長大な当麻曼荼羅厨子の修復を担当した漆芸家北村大通さんは、奈良時代から平安初期にかけて盛行した平文の漆芸技法がほどこされていることを発見したのであった。そして、その平文意匠の特徴などから、厨子は少なくとも平安初期を降らないことが改めて明らかとなった。

当麻曼荼羅の存在がどれほど広く知れわたっていたのかわからないが、「年譜」（『弘法大師全集』）によれば、弘仁一四年（八二三）、空海は当麻寺に参籠し、曼荼羅を拝し、帰京ののち嵯峨上皇に奏上したほどであった。このことは、当麻寺の浄土曼荼羅がすでに京洛の貴紳間におよんでいたことを語ってくれる。

なお、空海の当麻寺参籠をきっかけとして、中之坊実弁が空海に弟子入りするなど、三論宗から真言宗に改宗したとされる。ただ、現在の当麻寺山内には、真言宗と浄土宗の寺院が並存しているところから推せば、平安末期に流行する末法思想とともに、浄土曼荼羅の利益が喧伝され、当麻寺が浄土信仰の霊場として、貴顕・衆庶を問わず信仰を集めるようになったことはまちがいなかろう。

ところで、中将姫説話が広く流布するのは、能楽師観世元清が当麻寺縁起にもとづいてつく

った謡曲「当麻」「雲雀山」によるところが大きい。これは江戸期に近松門左衛門が脚色し、浄瑠璃や歌舞伎でも上演された。

中将姫と当麻曼荼羅

当麻曼荼羅とは、観無量寿経の経意をあらわした阿弥陀浄土変相図のことで、変相図とは経典の語る諸仏の浄土のありさまをわかりやすく絵画化したものをいう。当麻寺の浄土曼荼羅は、縦横ともに四メートルほどの巨大さを誇り、阿弥陀・観音・勢至・菩薩など三七尊と天人や楼閣などを配し、極楽浄土のありさまをあらわす貴重な作品としてつとに知られる。蓮糸で織られたとの伝説をもつが、じつはきわめて細く上質の絹糸で織られた綴織の曼荼羅である。

中将姫が織りあげたとの伝説はさておくとして、中国・唐製か本邦製なのか、なお議論のあるところであろう。

なお、現在当麻寺の本堂厨子内の正面に懸垂される曼荼羅（絹本着色、文亀本）は、文亀三年（一五〇三）七月に後柏原天皇が生母の菩提を弔うため銘文を書き入れ、永正二年（一五〇五）に供養奉納したものである。絵師は南都一乗院系の芝座絵所に属した慶舜法橋であった。

中将姫の曼荼羅伝説については、鎌倉期の『古今著聞集』がつぎのように語る。

右大臣藤原豊成の娘中将姫は、仏に帰依することしきりで、浄土教一千巻を書写して当麻寺に奉納したばかりではなく、天平宝字七年（七六三）に当麻寺で出家し、生身の阿弥陀仏を目

菩薩面をつける（護念院内）

にしたいと念じていた。すると、七日後に一人の尼僧が中将姫の眼前に姿をあらわし、もし阿弥陀仏を目にしたければ百駄の蓮の茎を集めよと告げる。姫は、そのお告げどおり、蓮の茎を近江国から取り寄せ、蓮糸を紡いだ。そして、それを霊水の井戸につけると、五色の糸となった。織り機に糸かけたところ、天女があらわれ、たちまちにして曼荼羅が織りあがった。尼僧は、わが身こそは阿弥陀如来であると中将姫に告げ、西の彼方に去っていった。その一三年後、姫は極楽往生をとげたのであった。これが当麻曼荼羅にまつわる中将姫伝説である。

中将姫が当麻寺で極楽往生を迎えたという伝承を再現するのが練供養であって、正しくは聖衆来迎練供養会式という。地元では「れんど」（練道か）「れんぞ」、あるいは菩薩面をつけるので「面かつぎ」などといい、菩薩に扮して行道する人も、介添え役も、地元を中心とした菩薩講の人たちから選ばれる。

菩薩面は目のところに小さな穴があいているだけなので、暑いばかりでなく、とても息苦しいらしい。黒紋付の介添え役なくしては、とても一人では歩けない。

大和では三月から五月にかけて、よく知られているところでは法隆寺や矢田寺、久米寺など

で「練供養」が行われている。かつてこの日は、農家は休みとなり、野外に出て食事を楽しむ遊楽の日であった。なにも農民だけの遊楽ではない。この日は農作業に入る前に山から田の神をお迎えしてお祀りし、神を饗応する大切な日であった。

こうした農耕神を祀る行事と極楽往生を願う庶民信仰とが結びついて、現在のような「練供養」が形づくられてきたのであろう。

練供養

練供養は、二五菩薩の来迎会であり、中将姫を浄土世界に導いていくさまを現実的に、しかも仮面劇的に表現した宗教行事で、そのはじまりは、平安時代の寛弘二年（一〇〇五）四月という。なお、来迎とは、西方浄土に往生を願う人たちの臨終（りんじゅう）を迎えるに際し、阿弥陀如来が菩薩をともない紫雲（しうん）にのってお迎えにきて、阿弥陀如来のまします浄土極楽の世界に誘うことである。

五月一四日、この日だけは本堂（曼荼羅堂）は極楽堂と名を変え、極楽堂から東門の近くにある娑婆（しゃばどう）堂にかけての約一二〇メートルの間に高さ約一メートル、幅約一・五メートルほどの白木の舞台が一直線に設けられる。この長い白木でつくられた無垢の舞台を来迎橋に見立てる。まさにこの橋こそが、彼岸と此（し）岸（あの世とこの世）、つまり極楽浄土世界と現世とをつなぐ極楽橋となる。

おがみ仏のお練り

午後の四時、読経についで太鼓と鉦の音が、いわば楽屋となっている護念院の堂内に響きわたる。それを合図に、まず宝冠阿弥陀坐像を胎内におさめた中将姫坐像の乗る輿が護念院を出て、極楽橋を娑婆堂に移される。極楽堂（曼荼羅堂）では当麻寺の真言・浄土両宗派の僧によって読経法要が行われ、真言宗の僧は阿弥陀如来陀羅尼を唱え、浄土宗の僧は開経偈や念仏を唱える。

極楽堂での読経がすむと、真言宗の僧たちだけはそのまま堂内にとどまり、極楽堂縁側に設けられた舞台で偈（仏徳を賛美する詩）を唱えるのだが、浄土宗の僧たちは極楽橋を娑婆堂にわたる。そのあとに母親たちに手を引かれた稚児行列がつづく。

娑婆堂での念仏法要の間、二五菩薩、すなわち薬王・薬上・法自在・獅子吼・陀羅尼・虚空蔵・徳蔵・宝蔵・金蔵・金剛蔵・光明王・山海慧・華厳王・衆宝王・月光王・日照王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威徳王・無辺身王の各菩薩たちは護念院から極楽堂に移り、いよいよ極楽橋をわたる行道（練供養）がはじまる。

菩薩たちがわたり終えるころ、両手に小さな蓮座を捧げもち、身体を左右に捻りながら中将姫を蓮座に掬いあげる所作をしながら進む観世音菩薩（スクイボトケ）、そして合掌したまま

身体を捻る勢至菩薩（オガミボトケ）がつづき、この二菩薩のあとに、天蓋をもつ普賢菩薩がしんがりをつとめるのである。

さきに極楽橋をわたる二二菩薩が、それぞれの介添え役の人に手を引かれ、前のあまり見えないこともあってのことだが、たどたどしい足取りでわたって行くのに対し、観世音菩薩と勢至菩薩の力強い行道は、見る人たちに極楽往生への安堵感を与える演出となっている。

三菩薩が極楽橋を進んで娑婆堂につくと、中将姫の胎内から宝冠阿弥陀坐像をとり出し、観世音菩薩の蓮座に安置する。ここが練供養の肝腎なところで、この所作で中将姫の生身の魂をお迎えしたことになる。そして、来迎したときとは逆に観世音菩薩を先頭に二五菩薩は再び極楽堂へ、すなわち西方極楽の浄土へと導かれていく。

すくい仏、曼荼羅堂に入る

かつては、行道がはじまると、極楽橋の下から菩薩たちを見上げる人たちが合掌して「南無阿弥陀仏」を唱えたものだというのだが、昨今はほとんど聞こえてこない。

ほどなく、陽は二上山にかたむき、山内のすべてが、ゆったりと静かに墨絵ぼかしの暮色に包まれてゆく。

奈良豆比古神社の翁舞

奈良に勤めはじめたころ、楽しみといえば休日の散策だった。和辻哲郎の名著『古寺巡礼』を片手に古寺社をよく訪ね歩いた。気分だけはすっかり和辻であった。「奈良の北の郊外はすぐ山城の国になる」にはじまる、浄瑠璃寺へも道をかえては何度か足をのばした。西大寺の僧忍性（にんしょう）が、病人救済のため建てた佐保川の北にある北山十八間戸（きたやまじゅうはちけんど）（重要文化財）を訪ねたり、コスモス咲き乱れる般若寺にも幾度か足を運んだ。寺の前を南北に走る京（奈良）街道沿いの奈良阪にある町並みは、落ち着いた風情にある。なだらかな坂のつづく奈良阪の家並みのまさに絶えようとするところに、いかにも由緒ありげな奈良豆比古（ならづひこ）という古社が鎮座している。この神社に古くから伝わる翁舞（おきなまい）を見たのもそのころで、篝火（かがりび）の紅蓮の炎が翁をゆらゆらと浮かびあがらせていた。裏手にあるうっそうとしたクスノキの巨木の印象とともに堅牢な記憶としてある。まるで幻想のような翁舞の夜であった。

奈良阪の古社

奈良阪は、奈良市街の北にあって、その街並みのきれたところが大和と山城との国境いをなしている。

奈良阪町の北の端に、能舞台を思わせる立派な拝殿をもつ奈良豆比古神社が鎮座する。このかいわいでは「奈良阪の氏神さん」と呼ばれ、地の神として土地の人びとから崇敬を集めている。この神社は、『延喜式』「神名帳」に「添上郡奈良豆比古神社」と記されており、いわゆる式内社である。

石の鳥居をくぐり、右に鏡池を見ながら石畳の道を進み、翁舞を描いた扁額のかかる門を抜けると、拝殿がすぐ目の前にある。拝殿のすぐ西側は一段高くなっていて、柵で囲まれ、そこに春日造りの小ぶりな三つの神殿が並んでいる。三神殿に祀られているそれぞれの祭神は、中央がこの地の地主神（産土神）の平城津彦神（奈良豆比古神）、右殿が天智天皇の第七皇子であり、光仁天皇の父親の施基親王、左殿が施基親王の第二子の春日王という。

翁舞がことのほか喧伝されている神社だが、本殿の建つ柵内には見るべき貴重な樹木のコノテガシワ（児手柏）が

コノテガシワ

あって、これも見逃せない。一見して、檜の葉に似ているのだが、檜の葉は裏が白いのに対し、表裏ともに緑色をした珍しい葉をつける。昭和二〇年代に植えられた二代目が小さい子供が手のひらを広げた形の葉をつけている。原産地は中国らしい。社殿のすぐ北側に、直径九〇センチものコノテガシワの巨木の古い切り株が残っている。

奈良山の　児乃手柏の両面に　左にも右にも　佞人の徒

と『万葉集』にも謡われているが、あるいは奈良豆古比神社のコノテガシワを詠んだのかもしれないと思えてくる。

また、社殿の裏は截ち切ったような深い谷になっていて、そこに樹齢一二〇〇年になろうかという、奈良県天然記念物指定のクスノキの巨木があり、見あげてなお大きい。

翁舞の由来

奈良豆比古神社の氏子は二〇〇軒ほどで、氏子たちによって古くからの宮座の伝統が受け継がれてきた。宮座とは、村びとが鎮守の祭礼を中心に村落社会の精神的結合をはかる組織のことをいう。奈良県の各地には、鎮守を中心とした宮座が残っており、いわば宮座研究の宝庫といえる。奈良阪郷の宮座の起こりや実際についての詳細はわからないが、おそらくは中世期までにさかのぼるものであろう。

神社には宮座保存会があり、子供が誕生すれば宮参りする。それが「座入り」となり、男児・

女児ともに米一升と酒一合、賽銭を供える。結婚した場合は、祝い金を供えることで「座入り」となる。男子四五歳で初老、五五歳で中老となり、六〇歳になると老中となる。六〇歳を迎えた年の正月二〇日から二五日までの間に行われる「弓初めの儀式」の日に「座入り」となる。

この神社の大事な祭礼は、祈年祭（二月一八日）・例祭（一〇月九日）・新嘗祭（十一月二六日）の三つの祭礼で、翁舞はその例祭の前日にあたる宵宮祭に拝殿において奉納される。翁舞は、古式を伝える貴重な伝統的な神事芸能であるところから、昭和二九年（一九五四）、奈良県の無形民俗文化財に、平成一二年には国から重要無形民俗文化財の指定を受けた。

こうした神事芸能は、宮座が中心となって行われるのが通常なのだが、ここでは宮座とは別に、奈良阪町内の中で「翁講」に入っている人たちによってのみ演じられ、奉納されるところに特色がある。もちろん、翁講の家も宮座の一員ではある。現在の翁講は二四戸から成っているが、かつては三〇戸をかぞえていたという。

翁舞がいつのころから行われたのか、その時期についてはわからない。ただ、医師の村井古道が享保二〇年（一七三五）に刊行した地誌『奈良坊目拙解』が「正中元年（一三二四）当社縁起」（「奈良豆比古神社縁起」）を抄録しており、そこに翁舞のことが記されていて興味ぶかい。そこには、つぎのようにある。

春日王不慮有疾、因茲潛退去於平安城、而密居于奈良山、所謂当社之地是也、尓時有男子二人、兄号浄人弟号秋王、二子俱至孝焉、慕来春日王於隠室、使此雖窮貧益々篤孝、削弓

及採四季花菓以沽市肆、而後其深孝厚竟達、叡聞賜弓削氏也（略）太祖浄人好散樂俳優、以此芸術祈春日明神、有験而竟父君春日王白癩病令平癒哉矣、則世云申樂能芸翁三番叟等面起于浄人、因之当郷人為能芸是此余風矣

これによれば、桓武天皇の時代、春日王は白癩病をわずらい、奈良山（奈良豆比古神社のある地）に隠遁していた。そこに浄人と秋王の二人の兄弟が訪ねてくる。二人は弓を削り、花菓を売り歩いて親に孝養をつくした。それが朝廷にまで聞こえ、そのことにより、弓削の姓を賜った。浄人は散楽を得意とし、父の快復を祈願し散楽（申楽・翁三番）を春日明神（奈良豆比古神社）に奉納したところ、神霊によって本復したという。奈良豆比古神社の翁舞は、ここに由来するというのである。

惜しいことに、『奈良坊目拙解』が収録する「正中元年当社縁起」は、江戸期の正徳三年（一七一三）に奈良阪町を襲った火災で、拝殿ともども失われたらしい。

翁　舞

奈良豆比古神社には、宮座組織があるにもかかわらず、宵宮祭には翁講の人たちによる翁舞奉納があるだけで、宮座の行事はほとんどない。宮座の長老格である「老中」（現在は約九〇名。年長者から一老・二老・三老といって老中の中でも特別の役割をもつ）は、直会殿から翁舞を見物するだけであり、三年の間、神社に奉仕して祭礼や直会などの世話をしてきた宮座三役（六

○歳の見習、六一歳の式司、六二歳の奉行）でさえ、松明の火の様子を見守るだけのことで、翁舞奉納にはまったく関係しない。

現在の翁舞は、いわゆる式三番で、前謡・千歳の舞・太夫の舞（翁舞。太夫と脇二人の三人舞）・三番叟の前舞・千歳と三番叟の問答・三番叟の後舞から構成される。式三番とは翁猿楽、つまり翁のことをいう。

翁舞（三人舞　撮影後藤親郎）

翁は、「能にして能にあらず」といわれるように、能楽としては最初に生まれ、しかも最も神聖視される芸能であり、五穀豊穣と生命の長久を祈る祝言舞である。翁こそは、神の来訪そのものを意味する。すなわち、招福神が翁に姿をかえて人びとの前に現れ、五穀豊穣と国土安穏を寿ぐのである。

興福寺東西両金堂の修二会に付随しておこったという「薪能」でも、まずは西金堂と東金堂、そして春日大宮社頭で翁舞が奉納されることからはじまる。それほどに、翁舞は別格の存在であった。

例祭の近づく九月二一日夜、翁講中の人が集まり、その年の翁舞の役どころを決める。神社から戸口順に左廻りに三軒が当屋（当屋頭一軒、平当屋二軒）となり、これが世話役となる。

千歳の役は一二歳前後の少年が、三番叟は二〇歳前後の若者がつとめ、翁舞の三人は五〇～六〇歳前後の人の役となる。二三日から一週間、神社の拝殿右手前にある集会所で稽古をつみ、一〇月四日には「勢揃い」といって、全員が集まり、衣裳を着けずに拝殿（舞台）で仕上げの稽古を行う。

いよいよ宵宮祭の一〇月八日の夜八時ごろになると、神主・笛・小鼓（こづつみ）・大鼓（おおど）・地頭（じがしら）・地謡・脇・三番叟・千歳・太夫の順で集会所から渡り床を通って舞台となる拝殿に進み、本殿に拝したのちにそれぞれの席に着座する。

笛と小鼓の音を合図に、「とうとうたらりたらりろ　たらりあがりららりろ」の前謡（地謡）があり、ついで

なるは滝の水　なるは滝の水　日は照るとも

と、長寿を祝う若々しく躍動的な千歳の舞が翁舞の前座をつとめる。

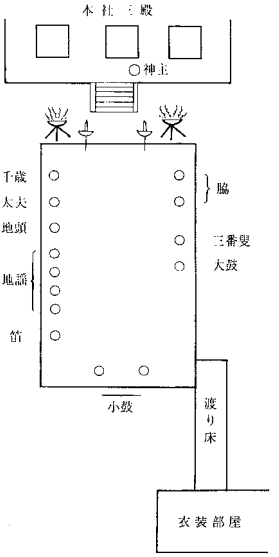
そして、太夫が

千年の鶴は万歳楽とうとうたり　また万歳の池の亀は甲にさんぎょくをいただいたり

と天下泰平と国土安穏を祈って舞う、太夫と脇による翁舞（三人舞）となり、この神事芸能のクライマックスを迎える。

このあと、千歳と三番叟との掛け合い（問答）へとつづく。三番叟が千歳に話しかければ千歳は正面（本殿）を向き、千歳が話しかければ三番叟は正面を向くといった具合で、両者は互

いに向き合うことがない。お互いが神に語りかける形で掛け合いが進んでいくところに特色があり、これは古い形式を伝えるものだという。最後に三番叟の力強い後舞で結びとなる。翌九日の午前に例祭式典が行われる。



翁舞の拝殿着座
（『翁舞』より）

この日、午後一時からは講中から選ばれた六〇歳以上の者が相撲の所作をする。所作だから、実際に相撲をとるのではなく、行司役の宮守ともども三人が白幣をつけた榊の杖を捧げもち、掛け声をかけて拝殿の周りを三周するだけのことだが、相撲神事としてもめずらしい。

奈良豆比古神社と春日社

翁舞の特徴は、三人の翁が登場するところにある。これは奈良豆比古神社に祀られる三祭神（施基親王・平城津彦神・春日王）にちなむものと解釈されているのだが、おそらく春日若宮祭（おん祭り）や興福寺薪能で行われていた三座（金春・金剛・宝生）の参仕（さんし）する形態にならったものかもしれない。

焼失したと伝える「正中元年当社縁起」は、祭神の一つとして祀られている春日王の子の浄

人が春日明神（奈良豆比古神社）に奉納した申楽に由来し、それ以来の伝統であると伝えるのだが、むしろ藤原氏の氏神である春日神社との関係において展開してきた神事芸能である可能性が高いとみなすべきであろう。

奈良豆比古神社は、かつては奈良神社あるいは奈良坂春日社ともいった。『奈良坊目拙解』が抄録する「奈良神社縁起」（焼失）には、春日神社との濃密な関係がみられる。

正中元年神主弓削氏記　光仁天皇宝亀二季辛亥正月廿日奉祭施基皇子於奈良山春日離宮
奈良津彦神是也　後奉諡田原天皇
同縁起曰　宝亀十一年庚申十一月廿一日、春日王奉祝三笠山春日第四御殿大神姫大神於当社号大宮、当社中之御殿是也
保延二季丙辰十一月廿二日春日若宮神天押雲命勧請当所左坐、奉号奈良春日三社也

すなわち、宝亀二年（七七一）年、施基皇子を奈良津彦神として「奈良山春日離宮」に祀ったこと、ついで春日王は宝亀十一年（七八〇）に春日神社の第四神殿の姫大神（比売神）を勧請して三祭神の中央神とし当社を大宮と号したこと、さらに保延二年（一一三六）には春日若宮神をお迎えして左神とし、これによって奈良春日三社（春日王・比売神・春日若宮神）としたとする。

春日四神殿とは、春日神社が祀る四祭神、すなわち武甕槌命・経津主命・天児屋命・比売神をいう。そして、保延二年といえば、春日若宮社が創建された翌年にあたる。真偽のほどは

さておくとしても、奈良豆比古神社が藤原氏の氏神である春日神社と密接な関係にあって推移してきたことがうかがえる。

うがった見方かもしれないが、大和と山城の国境にあたるこの地には、春日神社創建以前から悪霊や疾病をしりぞけ、結界を守護する地主神が土地の人びとによって祀られてきた。ところが、春日神社の隆盛がきわまると、その勢力下に入り、やがて組み込まれていったとするのが真相ではなかろうか。その意味でも、春日王の疾病平癒話は結界守護の地主神を彷彿とさせてくれる。

奈良豆比古神社（三社）

奈良豆比古神社には、室町時代の翁面や男面（老年）、女面をはじめとする二〇点ほどの能・狂言面（室町期～江戸中期）が伝存しており、いずれも貴重なものばかりである。とりわけ、癋見面には「千草左衛門大夫作　応永廿季（一四一三）二月廿一日」の刻銘がある。千草は面打師として著名な千種氏を指すことは疑いない。伝存するいくつかの面からみれば、かつてはもっと多くの曲目が演じられていたことがわかる。

奈良豆比古神社の翁舞は、土地の人たちだけによって護り伝えられてきた。目に焼きついたかがり火の炎は、今も鮮烈に残っている。

法隆寺の修正会と鬼追い式

福はー内　福はーうち　鬼はー外　鬼はーそと
天打ち、地打ち、四方打ち、鬼の目ん玉ぶっつぶせー

故郷の山形では、毎年、立春二月三日の節分の夜には、村のどの家からも、大人といわず子供といわず、豆撒(ま)きをする大きな声が遠くに近くに聞こえたものであった。この日は、まだ明るいうちに、稲の苗に見立てた豆殻の何本かを雪の上につき立て、田植えの真似事をする日でもあった。人びとに災いをもたらす悪鬼を追いはらい、五穀豊穣を祈る大事な行事のある日であった。二月の初めといえば、旧正月にあたり、どか雪になることが多かった。子供ごころに、こんなに寒く、大雪なのに、どうして田植えの真似事をするのか不思議に思ったものである。大和のあちこちに「鬼追い」や「お田植神事」を見てまわったのは、なつかしさも大いに手伝っていた。

修正会

寺院の法会として、また年中行事としても、もっとも大規模な行事といえば、正月に行われる修正会である。各寺の僧侶たちが、万民すべての人びとになり代わって、薬師如来や観音菩薩など、それぞれの寺院のご本尊に、国や人びとの犯した罪過を懺悔する法会で、これを悔過行法という。そして、この年の五穀豊穣を予祝するための行事でもあるから、ご本尊には盛りだくさんの壇供が供えられ、また色とりどりの造花で荘厳される。

法隆寺では、毎年、正月八日の後夜(夜半過ぎ)から一四日の夜半までの七日七夜にかけて、金堂において修正会が行われる。これを吉祥御願、あるいは吉祥悔過御行という。いつから行われるようになったのかはわからないが、『続日本紀』神護景雲元年(七六七)正月の記事に、

勅、畿内七道諸国、一七日間、各於国分金光明寺、行吉祥天悔過之法、因此功徳、天下太平、風雨順時、五穀成熟、兆民快楽、十方有情

と、称徳天皇が国家安泰と五穀豊穣、万民快楽を祈願して、宮中および大極殿、さらには諸国の国分寺に吉祥天悔過法会を行わせているので、おそらくこれを受けてのことと思える。

法隆寺の吉祥悔過は、現在は金堂で行われているが、もともとは大講堂で営まれていたという(古谷明覚「法隆寺の修正会及び修二会に就て」『南都七大寺行事』)。それによれば、寺に残る古い記録(「古今目録抄」「法隆寺年中行事」「寺要日記」等)に、

昔於講堂修之、始自承暦二年戊午正月八日、被移金堂(「古今目録抄」)

白河院御宇、承暦三年紀正月八日、此行被遷渡于金堂畢（「寺要日記」）

とあることから、悔過行法の場を大講堂から金堂に移すのは、平安期の承暦二年（一〇七八）か、あるいはその翌年のこととする。しかし、理由はわからない。

なお、金堂内には、白鳳期の作とされる吉祥天の塑像があり、法隆寺の吉祥天悔過法会との関連がうかがえる。なお、この吉祥天像は、もともとは旧食堂に安置されていた。

西円堂の修二会

金堂での修正会（吉祥悔過）についで、東院伽藍の中心である八角堂の夢殿においても、一〇日から三日間、修正会が、そして、月のあらたまった二月一日から三日までの三日間は、西院伽藍の西円堂（さいえんどう）において修二会が行われる。あらためていうまでもないことだが、法隆寺は西院と東院の二つの伽藍からなっている。

西院は、左右にならぶ金堂と五重塔を中心に、大講堂・中門・回廊・南大門・西室・東室などのある寺域で、むろん法隆寺の中枢部をなしている。

東院は、八角円堂の夢殿を中心とした、奈良時代になって新たに開かれた一郭で、ここは聖徳太子の斑鳩宮跡にあたる。夢殿は東院の本堂であって、天平十一年（七三九）、斑鳩宮の跡地に僧行信が建立したと伝える。

ところで、夢殿という名称が気にかかる、何とも心癒されるではないか。これは平安中期に

成立する聖徳太子の伝記である「上宮聖徳法王帝説」にある、

太子問ひたまふ所の義、師も通ぜざる所有り、太子夜の夢に金人の来りて、不解之義を教ふるを見たまふ、太子さめて後、即ち之を解す（略）是の如くの事、一、二に非ず

と語る内容からついたものであるという。つまり、経義の解釈に悩んでいた太子は、師（慧慈）に教えを乞うが師からも満足のいく理解は得られなかった。ところが、夢に金人があらわれ、太子に教授する。しかも、それは一度や二度ではなかったという。同じ話が、やはり平安期の「聖徳太子伝暦」にもある。なお、金人とは、金色の仏陀・仏像の意味である。

西円堂（提供飛鳥園）

大講堂の西北にあたる小高いところに西円堂（国宝）と呼ばれる八角形をした円堂があり、俗に「峯の薬師」といわれる。ご本尊は薬師如来坐像（国宝）で、高さが二四六センチもある巨像で、脱乾漆づくりの奈良時代の大作。この西円堂は、永承五年（一〇五〇）に破損したため、建長元年（一二四九）に再建された鎌倉時代の建築だが、もともとは、橘夫人の発願により、奈良時代の高僧行基がご本尊を造像し、西円堂を建立したとの寺伝がある。

橘夫人とは、橘諸兄の生母県犬養三千代のことで、彼女はのちに藤原不比等の後添いとな

り、聖武天皇の后となる光明子を産んでいる。

西円堂の薬師如来は、どのような病をも治癒してくれるという霊妙な仏さまとして知られ、一度参拝すれば病は快癒し、無病息災と延命長寿のご利益がえられるというので、古くから尊崇をあつめてきた。その霊験に対して、古くから人びとは参拝の際、あるいは祈願成就のお礼として、刀や弓、甲冑などの武器、武具類や鏡、衣類・絵馬などを薬師如来に奉納してきた。

こうした奉納品のうち、金属製のものは、明治期以降、梵鐘や仏鉢などの仏具類に鋳直されたり、軍事用に供出されたものもあったが、それでもなお約一万点以上が現存する。昭和五六年（一九八一）にはじまった総合調査（『法隆寺昭和資財帳』）によっても確認されている。

奉納品に記された銘文によって、畿内はもとより、九州や四国の地からの奉納もあり、いかに薬師如来の霊験が広く知られていたかがわかる。江戸時代には、西円堂に禁裏や仙洞の両御所からのご代参があり、その際に組帯や印籠・白銀などが寄進されている。このように、薬師如来の霊妙たる効験は朝廷にまでおよんでいた。

西円堂では、毎年二月一日から三日にかけて修二会が行われる。これは罪を懺悔しての罪障の消滅、あわせて国家安穏と無病息災を祈願する儀式であり、薬師如来の宝前で行われるので、薬師悔過の行法と呼ばれる。

なお、薬師悔過の供養文や寄進者名を記す木製の悔過板が遺存し、貴重であり、しかも、その背面に、鎌倉時代の嘉暦元年（一三二六）一二月の銘記がある。悔過板は、修二会の期間中、

西円堂の堂内に掲げられるもので、おそらく、もとは紙に書かれた供養文を、後世に残すために板刻されたものであろう。

最古の追儺会

西円堂の薬師悔過は、二月三日の夜の八時過ぎに、その行法のすべてを終えて、結願日を迎える。読経の声がやみ、堂内の灯明もすっかりかき消され、練行衆の僧たちが西円堂から退出しはじめると、あたかもそれを待っていたかのように、堂内からは錫杖、そして鐘と太鼓などの「ドン、ドン、チャン、チャン」の音が突如として聞こえてくる。その音は、境内の闇を引き裂いて響きわたる。鳴りものがやむのを合図に、黒鬼と青鬼・赤鬼が松明を手にして、薬師坊の羅生門と呼んでいるところから西円堂の北面の基壇上に、そのいかにも恐ろしげで異様な姿をあらわす。いよいよ鬼追い式がはじまる。

「大江山の鬼退治」をはじめとし、鬼は日本の説話や物語、伝説などにしばしば登場するのだが、なぜあのような恐ろしい形相をしているのか、また「悪霊邪気」の象徴がどうして鬼の姿をしているのか、たしかなところはわからない。鬼の正体とは何か、ある人は「疫病神」を、ある人は「鉱山師」と説くが、いずれも間違いとは思えず、答えは見つからない。

寺院の修正会や修二会の結願の日に行われるようになった「鬼追い」（「鬼走り」「鬼遣」ともいう）は、もとはといえば、一二月の晦日の夜に、宮中の東西南北の四門において疫鬼を門

外に追いはらう儀式である追儺に由来する。それはまた、中国の漢代以降、大晦日に方相氏が疫鬼を追いはらう儺の影響を受けた儀式で、日本では七世紀の末ごろから行われたという。疫鬼を追いはらう役の方相氏は、四つの目をつけた黄金の仮面をつけ、手には矛と盾をもつ異様な姿をしているところから、いつしか方相氏が鬼とみなされるようになっていった。

法隆寺に残る古い記録によれば、西円堂の鬼追い式は、鎌倉時代の弘長元年（一二六一）の二月にはじめられた行事と伝える。それを裏づけるように、法隆寺には、当時の鬼追い式に使われたとする追儺面の三つの鬼面（木造彩色）が現存する。こうした法会に用いられる面のことを行道面という。行道とは、さまざまな法会において、列をなして道を練り歩くことの意味であって、面をつける法会であれば、その面を行道面というのである。

法隆寺に残る鎌倉時代後期の三つの鬼面は、いずれも顔面の筋肉を猛々しく隆起させ、歯牙をむき出した悪鬼の面貌で、父鬼は頭上に三本の角を立て、母鬼は角をもたない。子の鬼は、頭の中央に一本の角をつける。三鬼ともに朱と緑青とで彩色されている。

父鬼と母鬼は桐材だが、子鬼だけは檜材。鬼を造形する彫刻や絵画が少なからず残っているが、鎌倉時代における父鬼・母鬼・子鬼三様の面貌を示すきわめて貴重な鬼面といえる。母鬼の左牙の欠損がまことに惜しい。鬼追い式所用とみなされる鬼面は全国各地に伝わるが、鎌倉時代の作例は数少なく、それだけにめずらしい。

こうした鬼面が語るように、法隆寺西円堂の鬼追い式のはじまりは、少なくとも鎌倉時代に

さかのぼり、しかも黒鬼・青鬼・赤鬼が同時に登場して乱暴狼藉をはたらくといった激しいものではなく、鬼たちの登場には時間差があり、それぞれの所作がじつにゆったりしている。それは、古様の鬼追い式の伝統を伝えるといい、大和ではもっとも古いという。

なお、鎌倉時代の三つの鬼面は、永くこの鬼追い式に供されてきたが、現在は重要文化財の指定を受けており、文化財保存の立場から使われていない。現在の鬼面は、昭和四七年（一九七二）に彫刻家の辻本干也氏が、鎌倉時代の三鬼面を忠実に模刻し、奉納したものがつかわれ、また、鬼を追い払う役の毘沙門天の面は、江戸時代の能面の癋見（べしみ）面を転用している。

鬼追い式

法隆寺の古い記録には、鬼追い式に関する記事がある。

御行畢賦リテ、御鼓学衆方末ヨリ六人ハ金剛鈴振形、第七臈太鼓打役、乱声七度之後、鬼三人、毘沙門（一躰鉾持）堂内ニ入テ、三遍走廻テ出堂、庵室ヨリ出作在之

この内容から、この儀式のはじまった当時（弘長元年）は、西円堂の堂内で行われ、鬼の役は西円堂の堂僧たちであった。現在は、西円堂外側の壇上で、しかも鬼役は法起寺近くの人たちがつとめることになっているが、それは江戸期の享保年間（一七一六～三六）ごろからのことだという。

修二会の終わるころ、西円堂北側にある薬師坊庫裏では、鬼に扮する人たちが風呂に入って

鬼追い式・黒鬼（提供飛鳥園）

身を清め、屠蘇を汲み交わし、それから鬼面と装束をつけはじめる。鬼たちの世話をするのは、法隆寺のさまざまな仕事にかかわってきた半僧半俗の算主と呼ばれる人たちである。

堂内に響いていた七度半の鐘と太鼓の音が鳴り止むのを合図に、まず三本の角をもつ黒鬼（父鬼）が、堂の北面に鉞をかついであらわれ、西廻りで堂の正面に立ち、鉞を研ぐ所作をし、沙主（算主）役から松明を受け取り、これを三回振りかざして、ひとしきり人びとをにらみつけたあと、群衆めがけて松明を放り投げる。

黒鬼が西円堂の壇上を一周すると、つぎに青鬼（母鬼）が鉄の輪棒をもってあらわれ、鉄棒を威勢よくふりかざし、松明を受け取り、これを黒鬼と同じように三回振り回したのちに見学の人たちに投げつける。つぎに、小さい角をつけた赤鬼（子鬼）が手に宝剣をもってあらわれ、黒鬼と赤鬼の親鬼にならって松明を投げ飛ばすのである。

かつては、松明を西円堂の基壇上に投げ捨てていた。それがいつしか見物する人たちに向かって投げつけるようになり、また、松明が体に当れば厄除けになるといった俗信もあって、見物者側の挑発ともあいまって、鬼たちは松明を激しく投げつけた。現在は松明による事故を未然に防ぐために、見物者との間に金網を張りめぐらし、鬼たちはその金網に投げつけるだけで

ある。少しやさしい松明投げとなった。

ひとしきりの鬼たちの所作のあと、鉦の音とともに鉾を手にした毘沙門天が登場して、鬼たちの前に立ちはだかる。毘沙門天は、滑稽な仕草をしながら鬼を追い回し、ついにその法力で鬼たちを調伏したところで、この鬼追い式は幕を閉じる。毘沙門天に威嚇されて逃げまどう鬼たちのユーモラスな姿と動きとが見物の人たちの笑いを誘う。

鬼追い式が済むと、参詣の信者たちに厄除けのためのお札「牛王宝印（ごおうほういん）」が授けられる。農家ではこれを家の神棚にまつり、苗代をつくるときに、水口（みなくち）に立てて水口祭りを行うのである。

鬼追い式・赤鬼（提供飛鳥園）

悪鬼邪気をしりぞけ、新春を迎えるこの行事には各地の信者たちによって家内安全を祈って数多くの餅が供えられる。この餅のことを「猫三枚」という。家族だけでなく、猫にいたるまで無病息災にと祈願するところからつけられた呼び名であるという。それにしても、我が故郷の「天打ち、地打ち、四方打ち、鬼の目ん玉ぶっつぶせ」には、鬼を追い払う祈りがこもっているではないか。

矢田寺の練供養

生駒山地の東麓に寄り添い、富雄川に平行して南北に横たわる矢田丘陵には、白鳳期から天平期の開基を伝える古寺が点在し、平安の古仏も多い。散策の道を斑鳩の地から北上すれば、「まつのさん参り」として厄除け信仰をあつめる松尾寺にはじまり、矢田寺、矢田坐久志玉比古神社、東明寺、滝寺廃寺、霊山寺、長弓寺とつづき、さらには「茶筅の里」で名をはせる高山の八幡宮にいたる。三年ばかり大和郡山市に住んでいたので、そのころよく足をのばした。わけても矢田丘陵山腹の東麓にある矢田寺から松尾寺を抜け法輪寺にいたるルートは、ことのほか気に入っていた。道すがら眼下に広がる国中の眺望はいかにもおだやかで、「山の辺の道」「葛城の道」ともども心なごむ大和の美しい古道である。霊山寺を発し、矢田丘陵を横断して龍田川、信貴山にいたる緑にかこまれた山道は、近畿自然歩道として人びとから親しまれている。

矢田の地蔵さん

「矢田の地蔵さん」

この呼び名で親しまれている矢田寺では、毎年四月の第三日曜日に練(ね)り供養が行われる。普段は静かな佇まいをみせる山内もこの日ばかりは厳粛な気韻とご利益にあやかろうとする人たちの熱気がないまぜになって、異様な空気に包まれる。この寺は、アジサイの寺としても知られ、シーズンともなれば、花を愛でようとする大勢の見学者があとを絶たない。

当麻寺の練り供養（五月一四日）は、中将姫が二五菩薩に導かれて西方浄土の阿弥陀如来のもとに極楽往生するさまをあらわすし、久米寺の練り供養（五月三日）もやはり、久米仙人が極楽浄土に導かれる様子が演じられる。ところが、矢田寺の練り供養はそれらとはまったく対照的で、逆に地獄から現世にもどってくるありさまを表現する。それは「矢田寺縁起」にもとづいている。縁起は、つぎのように語る。

平安時代のはじめ、矢田寺の満米(まんまい)上人は祈祷のために閻魔庁に招かれ、その責をはたす。そのお礼にと地獄見学を案内される。その際、満米上人は、地獄門で責め苦を受け、一般衆生を救おうとする地蔵菩薩の姿にいたく感銘し、現世にもどるや、はたして地蔵菩薩をつくったのであった。

矢田寺の練り供養は、満米上人と地蔵菩薩が二五菩薩とともに地獄から現世にもどってくるさまを再現する宗教的な演劇といってよい。満米上人とは、矢田寺中興の祖とされる平安初期

の人で、そのめずらしい名は、彼が地獄からもどる際に閻魔王庁から、米の入った漆塗りの箱をいただくのだが、いくら使っても箱の中にはいつも米がいっぱいに満ちていたといい、ここにその名が由来する。

矢田寺とは通称で、正しくは矢田山金剛山寺という。中世では興福寺の末寺となり、真言と法相の両宗を兼帯するが、江戸期には無本寺となり、高野山真言宗の寺院となった。現在、山内には、それぞれ準別格本山の北僧坊・南僧坊・念仏坊・大門坊の四つの塔頭寺院があり、この四か寺によって運営されている。本堂・講堂・春日社・開山堂・阿弥陀堂・菩薩堂・閻魔堂・大師堂・舎利堂・御影堂などがあるが、室町期の嘉吉年間（一四四一～四四）ごろには、三八もの堂塔があったらしい。

矢田寺本堂

東側にある山門から入ると、すぐに曲りくねった石段の坂道がしばらくつづく。登りきると、石畳の参道が、地蔵山を背にして建つ本堂に向かって真っ直ぐにのびている。これのつくる空間は、まことに壮観にして、しかも清々しい。四方二〇メートルにおよぶ巨大な本

堂が小さく見えるほどで、この石畳と左右の塔頭寺院の白壁がつくる奥行きこそがこの寺の美観の生命線といえよう。

なお、本堂前の石段に「貞和四年戊子二月十五日大勧進法眼実真（略）」の銘を刻し、南北朝期の一三四八年に築造されたことがわかる巨堂たる本堂は、江戸時代の修復によって大改造が行われ、往時の姿こそいささかそこなわれているものの、まさに威風堂々たる風格をそなえている。

本堂前の大きな石灯籠には、「長明燈　寛政五年五月甲州刺史　源朝臣保光」の銘文が刻まれてあって、大和郡山藩主柳沢保光（一七五三～一八一七）が寄進したものであることがわかる。保光（堯山）侯は、和漢の学問を修め、俳諧や能・茶道にもよく通じた人で、また途絶していた赤膚焼を復活させた藩主であった。

本堂に向かって右手前に建つ鐘楼（しょうろう）は、江戸初期に建造されたままの瀟洒な建築で、その上階内に、大和郡山市では最古の金石文である寛元四年（一二四六）の銘文をもつ古い梵鐘（ぼんしょう）が懸（か）かる。

ご本尊の交替

矢田寺の沿革を記す最も古いものは、護国寺本『諸寺縁起集』が収録する「矢田寺縁起」であり、その奥書に、建仁二年（一二〇二）に沙門静賢が施入したことが記される。それによれば、この寺は天武天皇の護持僧智通僧正が、天皇の御願円満のため建立した寺とする。

智通（生没年不詳）は、智達とともに斉明四年（六五八）に新羅船で中国に渡り、仏教を玄奘三蔵に学んだ人といい、元興寺の僧道昭（六二九～七〇〇）についで法相宗を伝えたところから、智達とともに日本法相宗の第二伝とされる。

矢田寺の実在が確認できる最初の史料が『扶桑略記』であり、その宝亀一〇年（七七九）一〇月六日の条が引く「延暦僧録」は、薬師寺の僧弘耀が、晩年にいたって、官寺の薬師寺を去り、人里離れた山中の矢田寺に隠棲したことを語る。このことから、奈良時代におけるこの寺の性格は、山林修行の場であったことがうかがえる。弘耀についてだが、その事績を記すものが一切ないのでわからない。惜しいことである。

本堂には、本尊の地蔵菩薩像を中央に、向かって右に十一面観音像、左に吉祥天像を配置するが、この三尊形式はきわめてめずらしい。菅家本『諸寺縁起集』では、十一面観音像を本尊としている。おそらく創建当初の本尊は十一面観音像であったのだろう。その造像年代については、護国寺本『諸寺縁起集』の「矢田寺縁起」が語る智通開山説にしたがい、開山にあわせた時期、すなわち白鳳期の作とする見方もあるが、やはり天平様式の系譜につらなるものとみるのが穏当であろう。

矢田寺の現在の本尊は、地蔵菩薩像である。本尊が創建時の十一面観音像から地蔵菩薩像に交替した時期は明らかではないが、建仁二年施入の護国寺本『諸寺縁起集』が「矢田寺縁起」を収録していること、また鎌倉期以降に矢田寺地蔵の縁起と霊験が喧伝され、地蔵信仰が庶民

の間に浸透していったこと、さらに地蔵信仰が極楽浄土世界を欣求する阿弥陀信仰とあいまってさかんになっていくこと、こうしたことを勘案すれば、本尊交替の時期を平安後期と考えてよかろう。

平安後期からの地蔵菩薩像は、右手に錫杖を、左手に宝珠をもつのが普通の姿なのだが、現在の本尊地蔵菩薩像は右手を施願印風に結び、左手には宝珠をもっている（宝珠は後補であろう）。ただ、興福寺の地蔵菩薩像（九世紀後半）のように、宝珠をもたず、右手を胸の前で説法印風のような姿をした平安初期の作例もあるところから、この本尊はそうした様式につながるもので、少なくとも一〇世紀前半ごろの貴重な地蔵菩薩像といえる。

なお、「矢田寺縁起」は、満米上人が地獄におもむき、地獄で苦しむ衆生になり代わって猛火の中にいる生身の地蔵菩薩の姿を見ていたく感動し、地獄から娑婆にもどるとすぐに、その姿を彫らせたのがこの地蔵菩薩像であると語り、「絹本着色矢田地蔵縁起絵」（重要文化財）には、満米上人が仏師たちに、地蔵菩薩像をつくらせている場面がある。

矢田地蔵縁起絵

矢田寺は本尊地蔵菩薩立像をはじめとし、十一面観音立像・阿弥陀如来立像・閻魔王倚像・司録坐像・虚空蔵菩薩坐像（北僧坊）・毘沙門天像（南僧坊）など数多くの文化財を所蔵し、これらはいずれも重要文化財。当寺には、地蔵信仰の寺として尊崇されてきただけに、地蔵信

仰にかかわるものが多い。

登り口の石段のそこかしこに石の地蔵さんの姿が目にうつる。ひと際大きいのが、参道脇にある紫陽花園の前に立つ石地蔵で、俗に「味噌なめ地蔵」（室町時代）とよばれている。これらの石地蔵たちはすべて、本尊と同じように、錫杖を持っていない。

貴重な文化財の中でも、本尊地蔵菩薩像と並んで最も著名なものが「矢田地蔵縁起絵」（二幅、鎌倉期）で、そこには満米上人が閻魔王庁に招かれ、冥官らに菩薩戒を授け、お礼に地獄見物を案内され、そこで地蔵菩薩に出会う話と娑婆にもどって本尊地蔵菩薩像をつくるいきさつ、そして地蔵菩薩が一般衆生を救済する二つの霊験譚（たん）が描かれる。なお、京都市にある矢田寺も「紙本着色矢田地蔵縁起絵巻」（二巻）を所蔵する。ともに重要文化財に指定されている。

味噌なめ地蔵（室町時代）

平安初期の公卿で、歌人の小野篁（おののたかむら）は、娑婆と地獄を行き来する不思議な人物であった。昼は朝廷に出仕する官人で、夜には閻魔王庁に仕えていた。篁は、矢田寺の満米上人と親交があった。折りしも、地獄の閻魔王庁では不吉なことがおこっ

ていた。篁のすすめで閻魔王庁に招かれた満米上人が菩薩戒を授けると、不吉なことはたちまちに止んだ。閻魔王庁はお礼にと満米上人を地獄見物に案内する。地獄の門を入ると、そこには火に炙(あぶ)られ、釜茹(かまゆ)での責め苦にあっている亡者の酷い姿があり、その中に亡者たちを救う地蔵菩薩の姿があった。感銘を受ける満米上人に、地蔵菩薩は「娑婆にもどって、阿鼻地獄から免れようとすれば、我と結縁するを衆生に勧めよ」とつげる。

矢田寺にもどった満米上人は、地獄世界で目の当りにした地蔵菩薩の姿を仏師たちに彫らせるが、思うような出来栄えではなかった。ところが、そこに四人の翁が現われ、たちまちにして彫りあげた。その翁こそは、仏法守護の神である春日明神の化身であった。ちなみに、本堂と講堂の間に春日神社（重要文化財）が鎮座する。その石段には、「正平二年（一三四七）十月日（略）」の刻銘がある。

ここに霊験譚を紹介しておこう。大和桜井に住む武者所康生は、継父の殺害をくわだて、屋敷に侵入するが、誤って実母を殺してしまう。日ごろから、狩りを生業とし殺生を重ねてきた報いと深く罪を悔い、矢田寺の地蔵さんに月詣りするが許されず、ついに地獄に堕ちて釜茹でにされる。そこに矢田寺の地蔵さんが現われ、康生の懺悔の心を誉めて地獄から救い出す。

今ひとつ、大和広瀬に住む貧しい女が矢田寺の地蔵さんに月詣りに来ていた。ところが、その留守中に七歳の男児が川に溺れて死んでしまう。嘆き悲しむ女の前に一人の僧侶が現われ、死んだ子供の額にお灸をすえたところ、たちまちにして子供はよみがえった。その僧侶こそ、

じつは矢田地蔵の化身であった。

こうした霊験譚が広く語り伝えられ、庶民の間に深く浸透していき、矢田寺は地蔵信仰の根本道場としての性格を濃くしていく。

地獄からもどる

地蔵菩薩は、釈尊入滅ののち、弥勒菩薩の現われるまでの五六億七千万年の間に、六道（ろくどう）で一般衆生を救ってくれると信じられ、ことに地獄での済度の仏としての信仰が篤い。賽（さい）の河原での救済は絵画にも描かれてきた。六道とは、人間が善悪の業因によって行きめぐるとされる地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの世界をいい、あらゆる生き物は、この六道の間を転々と生まれ変わりながら、苦しみつづけるのだという。

地蔵菩薩のご利益を再現する宗教劇が矢田寺の「地蔵来迎練供養」であり、矢田寺にとっても最も代表的な法会で、「満米上人冥途往来」とも呼ばれる。これは地蔵菩薩がこの世にもどられるさまを、「矢田地蔵縁起絵」にもとづいて、満米上人の現世と地獄との行き来、つまり冥途往来の様子をあらわすところからついた呼び名という。

かつては四月の二三、四の両日にわたって行われてきたが、近年は四月の第三日曜日と固定している。当日、本堂左手の奥にある菩薩堂から本堂までの約八〇メートルほどの間に曲りくねった橋が架かる。この橋こそ現世と地獄とを結び、しかも地蔵菩薩が満米上人をともない地

練供養（撮影前川久夫）

満米上人・閻魔・地蔵菩薩（手前から）
（撮影前川久夫）

獄からもどってくる掛け橋（来迎橋）となる。

練り供養は午後三時にはじまる。そのころには、菩薩堂では練り供養に加わる人たちがそれぞれの扮装を整えるのに余念がない。楽人たちの笙（しょう）・篳篥（ひちりき）・笛の音が山内に鳴り響きわたるを合図に、僧たちの読経と散華の先導にしたがい、青鬼・赤鬼・閻魔王、そして二五菩薩が介添え役の人たちとつづき、最後の地蔵菩薩が満米上人をともない本堂に進む。本堂での法要がすむと菩薩堂にもどり、練り供養はすべてを終える。

見物する誰しもが「もし地獄に堕ちても、これで救われる」と安堵の表情を浮かべている。ひとときの厳かな空気と興奮が静まるころには、陽は西に傾き、やがて矢田寺の山内はいつもの清閑さをとりもどしていく。なお、本堂の解体修理にともなって平成七年以降、練り供養は中断しているが、復活をのぞむ声がしきりである。

蔵王堂の蛙飛び

「これはこれはとばかり花の吉野山」。薄紅の雲が漂うように美しいという吉野山の桜をついぞ目にしていない。学生のころ、兄頼朝に追われた源義経が身を隠したと伝える吉水神社（吉水院）や南朝方が頼みとした楠木正行が室町幕府の高師直軍を迎え撃つべく（河内四条畷の戦い）、死を決し、手勢一四三名を引きつれ、吉野山の後醍醐天皇の御廟にお参りし、如意輪堂の扉板に過去帳がわりに名を書き連ね、「返らじとかねて思えば梓弓　なき数にいる名をぞとどむる」の辞世の句を矢尻で認めたという如意輪寺などを訪ね歩いた。二〇歳のころであったろうか。そのころ、『太平記』の世界にひかれ、ぼろぼろになった文庫本を片手に赤坂城や千早城の古戦場址などをまわり、笠置山にも足をのばした。とにかく人の波に堪えられないので、未だに吉野山の桜を見ていない。千本桜のたよりを聞くと、なぜか「歌書よりも　軍書に悲し吉野山」が口をついてでる。

役小角

金峯山（大峯山）は、吉野山から山上ヶ岳に連なる大天井ヶ岳や青根ヶ峯などの霊峯の総称であって、金御岳あるいは御嶽ともよばれた。

役小角の修験の本拠と伝えるように、ここは古くから山林修行の霊場であった。役小角は役行者の名で知られ、白鳳時代の七世紀後半に葛城山や金峯山の山中に修行した宗教者であり、修験道の開祖といわれる。

古来、人びとは山岳を神霊が籠り、あるいは神がみのすまいをする聖なる地として崇めてきた。はじめは、遠くから山の神霊を拝したのだが、やがて山麓に神霊をお迎えして祀るようになる。かくて社が成立する。

葛城山や金峯山の峯みねは、神霊の宿る霊山であった。葛城山では、役小角をはじめとし、東大寺毘盧舎那仏の造顕に尽力し、のちに大僧正に任ぜられた行基や、称徳天皇の寵愛を受け、宇佐八幡の神託を利用して皇位をうかがって失脚した道鏡なども葛城の山中で修行した人たちであった。

弘仁一三年（八二二）ごろ、薬師寺の僧景戒が撰述した『日本霊異記』の中に役小角の話がのっている。それによれば、役小角は葛木の厳窟にこもって修行し、孔雀明王の呪法をつかって鬼神を使役し、また葛木の山神をつかって金の峯（金峯山）と葛木の峯（葛城山）との間に橋をかけさせようとした。ところが、同じ葛城山の一言主神は、役小角が天皇を滅ぼそうとし

ているとの讒言により捕えられ伊豆嶋に流される。役小角は、夜になると、富士の嶺に飛んで修行した。その空に飛び立つ姿は鳳凰のようであったという。

三年後の大宝元年（七〇一）に罪が許されるが、仙人となって飛び去っていったという。同書では、役小角を葛城上郡茅原村の高賀茂氏の優婆塞、すなわち私度僧（政府の許可なく得度し僧となる者）としている。

役小角の配流について、『続日本紀』文武天皇三年（六九九）五月二四日の条はつぎのようにいう。

役君小角流于伊豆嶋、初小角住於葛木山、以呪術称、外従五位下韓国連広足師焉、後害其能、讒以妖惑、故配遠処、世相伝云、小角能役使鬼神、汲水採薪、若不用命、即以呪術縛之

葛城山の呪術者役小角は、小角の呪力をねたんだ弟子の韓国連広足の讒言により伊豆嶋に流される。世間では、小角が鬼神を使役し水を汲ませ、薪をとらせ、したがわないときは呪縛していたとの噂があった、というのである。ここから、役小角は山岳修行によって体得した験力をもって呪術的な宗教活動をしていたことがうかがえる。

同じような話が『今昔物語』や『扶桑略記』にもみられるので、平安時代には役小角に関するこうした伝承が広く流布していたのであろう。平安時代の後期ごろに修験道がかたまる以前のことであるから、役小角を修験道の開祖とするのは正確ではない。むしろ、修験道者にとっ

て求めるべき理想化した宗教者の姿こそが、役小角像であったとみるべきであろう。

金の御岳

金峯山は、『万葉集』に「み吉野の御金の岳に」とみえ、山上の大峯山寺本堂の発掘調査でも奈良時代の遺物が出土しているので、そのころからすでに山岳修行の聖地であったといえる。平安時代に入って、浄土教信仰が高まると、弥勒の浄土と目された金峯山への皇族や貴族の登拝、いわゆる御岳詣がいよいよさかんになる。宇多天皇は昌泰三年（九〇〇）と延喜五年（九〇五）の二度にわたって御幸し、藤原氏の氏長者で、のちに摂政・関白の地位に昇る兼家（東三条殿）は子の道綱をともなって御岳詣をしている。

大峯山寺本堂（撮影矢野建彦）

もっともよく知られているのは、藤原道長の御岳詣であろう。それをくわしく語る『御堂関白記』によれば、寛弘四年（一〇〇七）、栄華をきわめた関白藤原道長は、自らの息災と娘中宮彰子の皇子出産の無事を祈願するために山上大峯山に登拝するのだが、出発前にじつに七五日もの間、精進潔斎し、京から一三日をついやしてようやく御岳詣をはたしたのであった。

道長はこのとき、山上に経塚を築いた。はたして、江戸期の

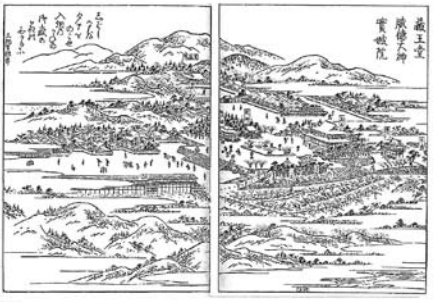
元禄四年（一六九一）の大峯山寺本堂の改修工事中に、そのことを裏づけてくれる金銅経筒とその中に納まる道長自筆の紺紙金字法華経が発見されたのであった。このように、平安時代の金峯山は、皇族と貴族の信仰をあつめ、ために御岳詣が流行し、多くの堂塔がつくられた。

ところで、山下（山上の大峯山寺に対し）の吉野山に、蔵王堂を本堂とする金峯山寺の寺観が整うのは鎌倉期以降のことであるが、南北朝期の内乱で足利尊氏の側近高師直によって後村上天皇の行宮が焼かれた際、金峯山寺も灰燼に帰した。現在の建物は、天正一六年（一五八八）ごろの再建である。巨堂の蔵王堂には、これまた巨大な本尊蔵王権現を祀る。むろん、山上ヶ岳（天川村洞川）の御岳詣の中心である大峯山寺にも蔵王権現が祀られている。

蔵王権現は、修験道を開いた役小角が金峯山での修行中に感得した尊像といい、右手に鈷杵をもち、左手を剣印相に結び、三つの目をカッと見開いた恐ろしげな顔（忿怒相）をして磐石を踏む姿をしている。修験者の守護神こそが蔵王権現であった。平安時代の後期以降、大峯山の修験者たちによって、蔵王権現信仰は全国に広まっていった。

蛙、人にもどる

毎年、七月七日の蔵王堂蓮華会では、見る人にはなんとも滑稽な所作にうつる「蛙飛び」行法が行われる。この奇祭を一目みようとする人たちがあたりを埋めつくす。蓮華会は、大和高田市奥田の蓮池から切りとった蓮華を金峯山寺（蔵王堂）の本尊蔵王権現に献花し、翌八日に



金峯山寺蔵王堂（『大和名所図会』）

山上ヶ岳の大峯山寺、および大峯山の峯通りの七五靡（なびき）にある各拝所に蓮華を供える行事で、吉野町の無形民俗文化財に指定されている。なお、奥田の蓮池（弁天池）は、役小角が産湯をつかったところとの伝承がある。

蛙神輿（撮影矢野建彦）

「蛙飛び」は、蔵王権現に献花したあとに行われる宗教劇で、蛙が飛びはねる仕草はまことにユーモラスにみえるのだが、なぜ蛙が主役となっているのか、何を意味する行法なのか、じつに不可解な行事というほかない。

金峯山修験本宗大本山の管長を導師に、一山の役僧や蓮華講、山伏たち大勢が迎えるなか、

奥田からの蓮華が吉野山に着くと、蓮を神輿（みこし）におさめる儀式が行われる。そのころには、竹林院前を出て街を練り歩く子供たちの小蛙神輿や若者たちの担ぐ青い蛙を乗せる蛙神輿（太鼓台）もすでに合流している。こうして、蓮神輿は蛙神輿を先導に黒門から発心門（ほっしんもん）をくぐり蔵王堂まで練り進む。そして、華籠（けこ）に盛った蓮華を蔵王権現に献じる蓮華会が厳修（げんしゅう）される。

午後四時ごろ、蓮華会がすみ、銅鑼が鳴り響けば、いよいよ特設の舞台上で「蛙飛び」がはじまる。脇導師の護持院住職の数珠にうながされ、大きく口を開けた金色の目をした蛙が蔵王堂の向正面に姿をあらわし、堂前に這い進み出ると、大導師の管長から懺悔文を、脇師から偈（げ）文（ぶん）を授かる。懺悔文などの奏上には、参列している修験者の全員が唱和する。なお、偈とは仏の功徳を讃美する意である。

いったんもとの位置にもどった蛙は、つぎに正面に向かって左側の竹林院、右側の喜蔵院住職の前に進み、頭を下げて呪法（じゅほう）を授かり、念珠での加持（かじ）（仏の加護）を受け、大導師から発菩提心真言（ほっぽだいしんしんごん）と懺悔文を授かり、最後に本覚（ほんがく）（清浄（しょうじょう））讃（さん）が唱えられ、大導師の脇にひかえる桜本坊と東南院の住職が蛙のぬいぐるみをはずして行法を終える。

ようやくにして蛙から人間の姿にもどって、この不思議な儀式は幕をとじる。

蛙飛び行事（撮影矢野建彦）

蛙になった男

「蛙飛びは」、蛙が導師たちの加持祈祷を受け、懺悔して人間の姿にもどるさまを見せる宗教劇。ただ、いつからはじまったのかわからない。わずかに、「当山年中行事条々」（竹林院蔵）はつぎのように記す。

（六月）九日、禅衆之役ニテ蓮華ノ迎ニ下向、往古ハ奥田ニテ延年在之、近年者丈六堂マテ下向シ、蓮華ヲ蔵王堂へ奉入、其夜験競アリ、番張等堂家方役

これは室町期の享徳元年（一四五二）および康正二年（一四五六）に記されたものなので、少なくともそのころには奥田の蓮華が蔵王堂に献花されたこと、そして、夜に「験競（げんくらべ）」があったことがわかる。験競とは、修験者が難行苦行の山林修行の末に体得した霊験（法力）を競いあうパフォーマンスであって、炎のなかを駆け抜けたり、刀身の上を素足で歩いて見せるのも一種の験競である。蛙飛びも、おそらく験競の一つではなかったのか。

これについては、金峯山寺につぎのような伝承がある。

白河天皇の延久年間（一〇六九～七四）、神仏をないがしろにし、他人の苦しみを喜ぶ高慢な男がいた。この男が、金峯山での修行中、行者を愚弄（ぐろう）し、蔵王権現の霊力をあなどる暴言をはいたところ、たちまち黒雲があらわれ、男は大鷲にさらわれ、断崖絶壁に置き去りにされる。恐怖のあまり男は助けを求めると、通りかかった一人の高僧が「人間の姿では無理だが、蛙の姿でなら」といって救い、蛙（男）を蔵王権現の前に連れて帰り、山内の修験僧が読経して祈

祷すると、蛙はもとの人間の姿にもどった、というのである。

この金峯山寺の伝承を演出したのが「蛙飛び」であって、その本質は修法（加持祈祷）によって、悪霊や物の怪、あるいは病気を退ける行法である。

奥田の蓮切り

蔵王堂の蓮華会に先だって、七月七日の早朝、大和高田市奥田にある厳島神社（弁天社）の北側にある弁天池の蓮華を切りとる「蓮とり行事」（奈良県無形民俗文化財）がある。これは、朝の八時ごろ、山伏一行の読経のなか、蓮取り（雷一〇八本）をする。

吉野山からは、蓮華を迎えに、金峯山寺住職の一人が導師となって行者講や蓮華講の人たちとともに奥田の興井山善教寺に入る。まず、白装束の白丁（はくてい）に担がれた蓮華桶を中心にした一行が役行者の母刀良売（とらめ）の墓にお参りする。そのあと厳島神社での大護摩法要となる。

その後、金峯山詣の入り口にあたる吉野川沿いの六田（むだ）の渡しをわたり、大峯山七五靡（なびき）の最初にあたる初花（はつはな）権現に蓮華を供えて心経・本覚讃を唱えたあと採燈（さいとう）護摩を行い、それから吉野山に登る。

江戸後期の「大和国高取領風俗問状答書」に、

吉野勝手小守の社人の内より壱人、毎歳六月八日高市郡奥田村に至り、役の行者堂の前なる池の蓮を取に至る。（略）社人は榊十六本持せ参り祈念す。蓮花百二十本切り候事なれ

ども、華揃ひ申さず候得ば、葉を交ぜて切る。翌九日夕方、蓮華を輿に戴せて帰る。峯の薬師まで真言方の衆徒残らず出迎ふ。其上本堂蔵王権現に捧げ法華を励む。同日夜蛙飛びと唱る法事有之、是は人を蛙形に造り、本堂を飛廻る。是を牛王の祈りと申候、俗説には、年中鍬、すきの先にかかりし虫の供養と申伝候

「蛙飛び」を「虫供養」とするところが興味ぶかいが、それはともかく、室町期にはすでに奥田の蓮華が蔵王権現に供えられていたのであった。なぜ奥田の蓮華なのであろうか。それに関する奥田の伝承を紹介しておこう。

役小角の母刀良売は、ある朝、奥田の蓮池にある捨篠（すてしの）の社に詣でると、一本の茎から二つの白い蓮が咲き、蓮の葉には金色の蛙がとまっていた。刀良売が茅（ちがや）を抜き、蛙に投げつけると目に刺さった。蛙が水にもぐった瞬間、あたりを美しく彩っていた五色の霧はたちまちにして消え、一茎二花の蓮華はもとの花にもどり、蛙は一つ目となって浮かびあがってきた。刀良売は、罪にさいなみ、病を患い、ついに命をおとす。母を亡くした役小角は発心（ほっしん）して修験の道をきわめ、蔵王権現をあがめ、母の菩提を弔うために蛙の供養を行ったという。

吉野山から蓮華を迎えに奥田にくる一行が、刀良売の墓と役小角のつかった産湯の井戸（善教寺本堂前）に詣でるのも、奥田の蓮華を金峯山の祠堂（しどう）に供えるのも、役小角の蛙供養に由縁し、蔵王堂の蛙飛びもこれに由来するとの言い伝えがあるが、あながち付会とも思えない。それほどに、大和高田市の奥田には役小角母子ゆかりの地が多い。

猿沢池と采女祭

「いえ、あまり飲めませんが」といいつつ、「暑気ばらいにどうか」との誘いに、猿沢池の近くの小奇麗な酒肆（しゅし）にかかる麻暖簾に分け入ったのは、たしか美術館につとめてはじめて企画した「根来の美展」を終えてほどないころであった。洒脱（しゃだつ）な上司が慰労してくれたのである。踊りは坂本流を舞い、興ずれば三味を手にする、小倉生まれできっぷのいい、小粋な女将さんにすすめられるまま、飲み方もわからずに、ずい分と盃をかさねた。すっかり酔いがまわり、外に出た途端にますますひどい気分となり、ついにベンチに倒れ込んでしまった。猿沢池の水をしたたか飲んだまでは覚えているのだが、哀れ、初めて誂えたばかりの背広は池の水面に浮き、やがて月の明かりのなか藻屑ときえていった。そのころは、美しい采女が身を投じた池とは知る由もなく、ましてやこの池に龍が棲んでいたとは思いもしなかった。奈良にきて、すぐに龍の吐く水を呑んでいたのである。

南都八景

猿さはの池の玉藻のかすことに　ひかりやわかつ秋の夜

幕末の国学者で勤皇志士でもあった伴林光平（ともばやしみつひら）が詠むように、春日と三笠の峯みねに昇る月や興福寺の五重塔を水面にうつす猿沢池は、とても碧水というに、はるかにほど遠いが、だれの歩みをも留めさせ、しばしなごませる風情をもっている。塔影の映える美しい水辺の景観を大切にしたい。

猿沢池の玉藻（たまも）を詠む和歌は多い。

猿沢池

澄まず濁らず　出ず入らず　蛙はわかず　藻は生えず
魚が七分に水三分

との俗謡が残されているように、池に藻はまったく見あたらない。不思議なことである。かつては藻が生えていたのであろうか。「玉藻刈る」「玉藻よし」のように枕詞であろう。少し前に池の水を抜きとっての浚渫工事があったが、ついぞ藻のひとつだに見かけなかった。

猿沢池は、室町時代から京都の貴顕にも聞こえ、南都の名所となっていたらしい。寛正六年（一四六五）九月、室町幕府の八代将軍足利義政は、これまで室町歴代の将軍が

春日社に参拝した折りに南都を巡礼した例にならって（興福寺と東大寺諸堂塔の参詣）、南都に下向して春日社に参詣し、春日若宮社祭礼に臨席している。その際、義政は祖父義満がそうしたように、正倉院に伝来する名香木「蘭奢待」を截りとっている。よく知られた話である。

義政の南都下向に随行した臨済宗の禅僧季瓊真蘂は、八つの景勝地を選び、これを「南都八景」と名づけた（『陰涼軒日録』）。「東大寺の鐘」「春日野の鹿」「南円堂の藤」「猿沢池の月」「佐保川の蛍」「雲井坂の雨」「轟橋の旅人」「三笠山の雪」の八景である。

南都八景は、中国・湖南省の洞庭湖の南を流れる瀟水と湘水の合流するあたりの八つの佳景、すなわち「平沙落雁」「遠浦帰帆」「山市晴風」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙寺晩鐘」「漁村夕照」のいわゆる瀟湘八景になぞらえたことはいうまでもない。瀟湘八景を題材とする絵画と詩文は、中国・北宋時代の十一～一二世紀ごろにさかんになり、それが彼我の禅僧を通じて日本の禅林生活にもたらされ、大いに流行する。

日本の八景といえば、すぐさま「比良の暮雪」「矢橋の帰帆」「石山の秋月」「瀬田の夕照」「三井の晩鐘」「堅田の落雁」「粟津の晴風」「唐崎の夜雨」と指を屈する、琵琶湖周辺の佳景を選りすぐっての近江八景が有名だが、南都八景はこれより先の半世紀も前のことである。にもかかわらず、あまり流布しなかった。

『大乗院寺社雑事記』に、一服した山伏から受け取った代金が木の葉だったという話をのせており、猿沢池の池畔にはすでに見物客を相手にする茶店ができていた。

興福寺の花園

周囲が約三〇〇メートルほどの猿沢池がいつつくられたのか、くわしくはわかっていない。わずかに、『興福寺流記』が引用する「宝字記」と「天平記」に、それぞれ「南花園四坊　在池一堤」「佐努作波池」とあり、興福寺本来の寺地のほかに南大門の下に、「花園」があった。それは「佐努作波池」という池堤であった。その花園は、興福寺の諸尊に供える花を植栽する、蓮池だったのだろうか。

疑いなく、「佐努作波池」は現在の猿沢池であろう。だから、天平期ごろにはすでに存在していたことがわかる。サヌとは狭い野、サワは沢のことであって、狭い野を縫って流れる渓流にある池、ということになろう。地形的にみて、おそらく人工的につくった池であろう。

少し以前のことだが、「山階寺南花園池」と墨痕あざやかに書かれた平安初期ごろの木簡が平城京東三坊の側溝から出土している。山階寺とは、山科にあった興福寺の旧称である。

なお、興福寺の南大門は、江戸期の享保二年（一七一七）正月四日、興福寺講堂からの出火で伽藍の大半を焼失したときに罹災し、その後は再建されなかった。今は礎石だけを残すにすぎない。五月には、この南大門跡の芝生の上で薪御能が行われる。

中臣鎌足は、蘇我氏打倒をはたしたならば、きっと丈六の釈迦三尊像と四天王像をつくり、四天王寺に安置することを発願する。蘇我大臣家を滅ぼしたものの、寺院造営を成就しないままに病床についてしまう。天智天皇八年（六六九）、夫人の鏡女王は夫鎌足の病気快癒を祈願

するため、造寺を願い出て許され、山背国山階に寺院を建立する。この寺こそが興福寺の前身にあたる山階寺である。

その後、この寺は天武天皇元年（六七二）、寺地を飛鳥の厩坂に移して、厩坂寺となり、さらに和銅三年（七一〇）の平城京遷都にともない、大安寺や薬師寺などの大寺とともに奈良の地に移る。鎌足の子で、時の権力者藤原不比等（六五九～七二〇）は、平城京の外地にあたる現在の地を寺地と定め、寺名を興福寺とあらためたのであった。

伽藍の整う時期についてはなお不明だが、『続日本紀』の養老四年（七二〇）一〇月一七日の記事に「置造興福寺仏殿司」とあることから、養老四年にそれほど歳月をおかずして成ったかと思える。藤原氏の氏寺とはいえ、広壮な規模をほこり、官寺に比肩するほどの寺院組織であった。

率川（猿沢池の南西下）

話を猿沢池にもどそう。池の形からすれば、春日山の南西麓からの湧き水がやがて渓流（率川）となる流れを堰とめ、その水を溜めてつくった池であることがわかる。かなり大がかりな土木工事であったと想定できる。現在、率川は猿沢池のすぐ南側の崖下を流れ、このあたりでは菩提川とよび、これより下流の率川神社付近では子守川といい、やがて佐保川に合流する。流れの大半は暗渠となっているが、所どころに欄干を残していて、川にかかっていた橋の名残

りをとどめている。

四月一七日には、猿沢池で興福寺の放生会が行われていた。これは、龍華院本堂前に鯉や鮒の入った桶が置かれ、僧の読経ののちに、魚に戒を授けて仏縁を結ばせ、池に放つ法会である。放生とは捕えた生き物を逃がし放つことであって、多くの寺院に放生池があるのもそうした理由からである。

猿沢池の龍

猿沢池にはかつて龍が棲んでいたらしい。『今昔物語』と『宇治拾遺物語』にこんな話がある。

奈良に蔵人得業恵印という僧がいた。大きな赤い鼻の持ち主だったので、人びとからは「鼻蔵」と呼ばれていた。この恵印が若い時分に、いたずらに「某月の某日、此池より、龍のぼらんずるなり（龍がのぼるであろう）」と書いた立札を猿沢池のふちに立てたところ、行き交う人はもちろんのこと、老いも若きも皆みなが「ゆかしき事かな（是非みたいものだ）」と大騒ぎとなった。鼻蔵は「をかしきことかな、我したる事を、人びとさわぎあひたり、おこ（おろか）のことかな」と、騒動をよそに、心の中で「馬鹿げたことよ」と恵印ひとりほくそえんで過ごすうちに、ついにその日がやって来て、路も通れないほどの大混雑となった。大騒ぎする人びとをあざ笑っていた恵印の心にもいつしか、「もしかすると龍が昇るかもしれない」と疑心暗鬼が生じていた。恵印は頭から衣をかぶって顔を隠し、興福寺の南大門の壇上にのぼって、

龍の昇るを今かいまかと固唾をのんで待っていた。しかし、ついに龍も何者も池のなかからは現われ出なかった。

芥川龍之介の『鼻』はこれに取材した短編で、芥川は「恵印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇っていく十丈あまりの黒龍が朦朧として映りました」と、恵印には龍が昇るさまが見えたと書いている。しかし、この部分は出典にはなく、芥川の創作である。『鼻』は「うそから出たまこと」の人間の心理を鋭くえぐり出している。

周知のように、芥川は歴史小説の大部分を古典に取材している。『羅生門』をはじめとし、『藪の中』『運』などは『今昔物語』を出典とし、『芋粥』『同祖問答』『好色』などは、『今昔物語』と『宇治拾遺物語』の双方に載っている説話にもとづいている。

猿沢池の龍の話を今ひとつ紹介しておこう。室生寺は、尾張国出身であるところから「尾張大僧都」と呼ばれた賢憬（興福寺の修円僧都の師）が創建した寺とされるが、これ以前に信仰されていたのがこの地の龍穴神であった。室生寺に関するもっとも古い史料は、承平七年（九三七）の「室生山年分度者奏状」であって、そのなかに「興福寺別院室生山寺龍穴神」と記されており、興福寺との関係が深かったことがわかる。この龍穴神こそは『延喜式』「神名帳」にある「室生龍穴神社」にあたる。室生の龍神への請雨止雨の修法は、天応元年（七八一）にはじまる。そうすると、あるいは室生山寺の創建はこのころかもしれない。

ともかく、室生は龍神信仰の聖地であった。その龍神のふるさとは、猿沢池であったという

のである。鎌倉期の『古事談』によれば、室生龍穴の龍王は猿沢池に棲んでいたのだが、天皇の寵愛の遠のくのを悲しんだ采女が池に身を投げたことから、春日山中の香山（こうせん）に棲み家をかえ、やがてそこにも死人が棄てられるようになったので、さらにそこから室生の龍穴に移ったとの話を載せている。つまり、室生の龍王こそは猿沢池に棲んでいた龍だというのであるが、興福寺と室生寺との関係からつくられた説話であろうか。

采女祭り

昔、ならの帝につかうまつる采女ありけり、顔容貌いみじうきよらにて、人びとよばひ、殿上人などもよばひけれど、あわざりけり。そのあわぬ心は、帝をかぎりなくめでたき物になむ思ひたてまつりける。帝めしてけり。さて後又も召さざりければ、かぎりなく心憂しとおもひけり

これは、一〇世紀中ごろの『大和物語』にある「采女入水伝説」の説話で、平城天皇（文武天皇説もある）に仕えた美しい采女は、帝の寵愛を受けるが、やがて帝の心が離れてしまう。寵愛の失われゆくのを嘆き悲しみ、夜に猿沢池に入水する。采女を哀れんだ帝は猿沢池に行幸し、人をして和歌を詠ませたところ、柿本人麻呂は

わぎもこのねくたれ髪を猿沢の　池の玉藻とみるぞかなしき（池の玉藻が愛する女の寝乱れ髪に見えるのがとても辛い）

采女祭りの花扇使

と詠み、帝は

猿沢の池もつらしや吾妹子（わぎもこ）が　たまもかづかば水ぞひなまし

（猿沢の池もむごいことをしてくれる、愛しい女が藻に沈むなら、水が乾いていてくれればなあ）

と詠んで、池のそばに采女の墓をつくらせたと伝える。

采女入水は有名な話だったようで、清少納言も『枕草子』のなかで

「猿沢の池は、采女の身投げたるをきこしめして、行幸などありけんこそ、いみじうめでたけれ」とふれている。ただ、柿本人麻呂の和歌については、「いふもおろかなり」と手きびしい。

猿沢池の北西の傍らには、小さな采女神社（祭神は采女命（うねめのみこと））が西向きに建っている。これには、つぎのような伝承がある。采女の霊を慰めるため祠を建てたところ、采女の霊があらわれ「わが命を捨てた池を見るにしのびない」と、池に背を向けてしまったので一夜にして西向きになったというのである。もとより俗説で、あるいは興福寺が春日社の祭祀に関与したいがためにわざわざ創建した春日若宮社にならって西面しているのかもしれない。

仲秋の名月の夜、この神社で采女の霊を慰める例祭が行われてきたが、同社は春日社の末社

である関係から、昭和二八年（一九五三）、春日大社水谷川忠麿宮司の発案により、現在のような王朝絵巻風に姿をかえたという。

午後四時、秋の草花でつくった二メートルもの大きな花扇を数十人の稚児たちがひき、一二単衣の花扇使が御所車に乗って市内を練り歩く。同六時ごろになると、花扇奉納の儀式が行われる。一五夜の月が御蓋山の上に姿をあらわすころ、池に浮かべた龍頭船と鷁首船の二隻の船に花扇を移してまん中に立て、花扇使と稚児を乗せ、管弦船の南都楽所の楽人たちの雅楽の調べのなか、三〇あまりの流し灯籠の間をぬうように池を二周し、花扇使の乙女が花扇をそっと水面に浮かべると、采女の霊を慰めるこの華やかな行事は幕をとじる。

采女神社

采女の出身が、かつての安積（福島県郡山市）であった縁により、奈良市とは昭和四六年（一九七一）に姉妹都市となった。郡山市では、三〇年ほど前から八月に采女祭を行っていると聞くが、まだ足を運んでいない。